座会『集客交流産業による地域振興』

松田　義幸（実践女子大学教授、(財)ハイライフ研究所理事）

福士　昌寿（関東学園大学教授、(財)ハイライフ研究所理事）

後藤　　仁（神奈川大学教授）

手塚　　伸（山梨県商工労働観光部産業交流課、現在(財)山梨総合研究所）

中田　裕久（株式会社オオバ環境開発デザイン研究所主任研究員）

犬塚潤一郎（リベラルアーツ総合研究所研究主幹）

小田　輝夫（(財)ハイライフ研究所専務理事）

小坂井達也（(財)ハイライフ研究所事務局長）

日　時　平成１３年２月１９日（月）10：30～17：00

場　所　（財）ハイライフ研究所

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

目　　次

経過説明　1

（１）はじめに（全体的状況）

（２）ＶＩに関する座会に至る経緯

セッション１　「山中湖の新しい交流人口の創造」　6

１-１　山中湖の現状と課題

１-２　世界の高質リゾート地の事例

１-３　山中湖の総合的な活性化戦略

１-４　枠組みについて

１-５　世界の高質リゾート地：事例発表

ａ．英国湖水地方

ｂ．ザルツカンマーグート（オーストリア）

セッション２　「山梨県におけるビジターズ・インダストリーの展開」　29

２-１はじめに

２-２　ビジターズ・インダストリーとは

２-３　山梨県での展開の契機

２-４　山梨県での展開過程

２-５　現在の施策大系

２-６　現在の進め方

２-７　今後の展開に関する私見

２-８　原点としての観光技能の取り組み

２-９　コメント ― マーケットの観点から

２-１０　「ビジターズ・インダストリーとＩＴ」

２-１１　ローカルとグローバル

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

セッション３　「グリーンツーリズムの理念と方法- 山形県西川町の事例報告」　58

３-１　はじめに

３-２　雪国に魅せられた詩人・丸山薫

３-３　いきいきした西川町の観光事業企画

３-４　ワイルドな自然に立ち向かう詩人たち

３-５　ブナの原生林の「月山自然学園むら」づくり

３-６　大江町の町づくり

セッション４　「総括」　66

４-１　地域における価値創造

４-２　人材育成

４-３　失敗例の分析

４-４　遊び方を知らない日本人

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

経過説明

（松田）　経過を報告いたします。

ビジターズ・インダストリー（集客交流産業）で、地方をどのように活性化するかというシンポジウムを開こうと思っていました。企画はいいのですが、自治体・市町村からそのような企画に出張費が今は全く出ない状況にあり、１泊２日となると休暇を取って自費で来なければなりません。「地方分権、地方の時代」と言われながら、地方の人たちと地方をどうしたらいいかという会議を開こうとすると、その経費すらどの自治体も出せないということで、今回の我々の考えは、企画はいいが独り相撲になってしまいます。それではこのプロジェクトを先に延ばすかといえば、地方の方々に参加してもらい、我々が緊張感を持って１日か２日議論すれば、集まったオーディエンスだけでなく、その緊張感から生まれたレポートは全国の地域の人たちにも非常に参考になるものができると考えました。

ハイライフ研究所としても、この問題は関心があるテーマで、かつての経済企画庁が地方の活性化をどう行うか、そのソフト・プログラムを作るときに関心を持っていたわけです。地方の地域活性化にこれまで関心を持ってきた人たちに集まっていただいて議論をすれば、この時点で我々が考えるビジターズ・インダストリーの理念と方法を、さらに実際化に向けていいレポートをまとめ上げることができるのではないかと考えたわけです。

そこで今日の会議は、４つのセクションによって進めたいと思います。セッション１は、ハイライフ研究所が地域活性化に対して、今までどのような準備をしてきたかを小田さんから話していただき、その後みんなでダイアローグを行いたいと思います。セッション２で手塚さんからも、山梨県のビジターズ・インダストリーを話していただき、そのあとダイアローグを行う。セッション３で松田からも、山形県で過去３０年くらいやってきた経験を話させていただき、ダイアローグを行う。以上、３つを進めて、セッション４で全員で総括、ビジターズ・インダストリーの理念と方法、これからの展開を議論をするという、４部構成で進めていきたいと思います。

（小田）　ＶＩ（ビジターズ・インダストリー）に取り組んで２年近くになりますが、これまでかなり流れが三転、四転しているので、今までどのようなことを考えてきたかを、小坂井の方から簡単に説明をさせていただきたいと思います。

２年前に松田先生から、三重県の二見浦の例があり、これからの地方行政では集客交流が非常に大きな問題で、今までのハードではなく、ソフトを中心価値にしてＶＩができないかという問題提起をいただきました。今まで何回か松田先生を中心に詰めてきて、そのたびにいろいろ問題点があり、案をどんどん変えて今日に至ったということで、今までのいきさつを説明させていただきます。

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

（小坂井）　冒頭、松田先生から、皆さんにお集まりいただいて討論し、研究報告書を取りまとめていきたいという経緯について説明がありました。重複する部分や、皆様がすでに熟知しているシーンもあるかと思いますが、もう一度あらためて、今日の会議を始めるにあたり、流れを簡単にご説明をさせていただきます。

（１）はじめに（全体的状況）

①地域経済をめぐる現象

我が国は、一時上向くかに見えた経済も、株価の大暴落にみられるように実態経済はまだ脆弱であり、依然回復が見えないまま２１世紀を迎えています。地域経済も例外なく厳しい局面にあります。特に、観光地においては来訪者一人あたりの消費支出額が伸び悩み地域経済に深刻な影を落としています。苦境を乗り越えるための創意工夫は各地域で取り組みが行われていますが、若干の成功例があるものの、小手先の戦術的工夫であったりして、地域経済が自立的に回復している兆しは残念ながら窺えません。例えば、山中湖においても同様の状況を迎えつつありました。

②従来型観光地からの脱皮－新しい価値を創造した観光地へ・山中湖への提案－

多くの観光地が観光収入の低下に悩んでいる中で、山中湖は従来型観光地からの脱皮を目指し、“ 新しい価値を持った観光地 ” を目指しました。石割の湯や紅富士の湯の建設、花の都公園の整備や農地の有効活用などがその例ですが、特筆すべきは “ 文学の森の創造 ” です。山中湖村では、この森を活用して、様々な価値観が交差する文化の交流拠点を形成し、多くの交流をそこに創造しようとしました。同時に山梨県では、ビジターズ・インダストリー（集客交流産業：以下ＶＩと称す）によって地域の総合的活性化を目指していました。地域資源を創造・再評価・活性化し個性豊かな地域資源を創造しようとするものです。“ 文学の森 ” を核とした新しい方向性として “ ＶＩによる地域振興 ” に基づいた検討がなされました。

③ＶＩによる地域振興－中心価値の創造－という概念を全国の地域にむけてプレゼンテーション

地域アイデンティティを抽出し、新たなコンセプトに基づき価値付けを行い、既存のモノ、自然、等に思想的背景を蘇らせ、物語性を持たせた “ 意味性 ” を付与することで、「特別の想い」を創造します。こうした “ ＶＩによる地域振興 ” という考え方を、山梨県・山中湖を事例にとりあげながら広くプレゼンテーションをすることの必要性を認識したわけです。

④ＶＩの基本概念はＮＩＲＡが構築し、その考えに基づいて三重県と山梨県で展開されました。その２県のケースを全国に紹介したい、これが全体的な状況です。当プロジェクトが、どう動いてきたかいう事実関係を以降述べます。

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

（２）ＶＩに関する座会に至る経緯

①時系列的にみた企画の経緯

(財)ハイライフ研究所では、平成１１年度の事業計画として「集客交流産業による地域振興」に関する会議・催しを事業として決定しました。これを受けて、シンポジウム第１案の基本的構成として、第１部「我が国の国土計画の昨日・今日・明日」というテーマで、５全総までの我が国の国土計画の理念をレビューし、そこから２１世紀型の地方分権のビジョンを導き出し、グローバル、ボーダレス時代の地域振興の理念と方法を探る。

第２部「ＶＩと交流人口の拡大」と題するシンポジウムを開くことを考えました。主催は、(財)ハイライフ研究所です。

しかし検討の結果、以下理由により概要を変更しました。

１つは、現在、国土計画そのものを議論すべき時代でも時期でもないであろう。また５全総以降、当時の国土庁の関心は、中心市街地の活性化法案、大規模店舗立地法などにむき、ＶＩとの関連付けに難しさが出てくる。また、マクロの論議をしても意味がなく、ターゲット（聴取者）をだれに想定するのか難しいということで、ＶＩに絞ったやり方にしていこうということで第２次案ができました。

第２次案は第１部を事例研究報告とし、ザルツブルク、イギリス湖水地方、その他のケースをとらえ、ＶＩの考え方と実践をそれぞれ報告していただく。第２部は「ＶＩと交流人口の拡大」というシンポジウムです。

場所は山中湖村、ないしは甲府とし、終了後、参加者とパーティーをペンションで開催し、トーク・インをしたらどうかということです。しかし、この第２次案も以下の状況変化により、次に述べる第３次案に変更になりました。

１つは、山梨県としては山中湖での開催希望がありましたが、ハイライフが主催ということで全国規模のテーマを設えることが必要でした。またこの時点で、参加者は全国対象ということで、地方自治学会にも参加を要請し、中心を地方自治学会の学会員の皆さんにしてみたらどうかということから、交通のアクセスなども含めて東京開催でということになりました。

ただし、パーティーやトーク・インを実施する場合、東京では会場の問題もあり難しいので、湘南国際村を会場として行う、という第３次案が作成されました。

第３次案は、第１日目、基調講演「ＶＩについて」、松田先生に講演をいただき、事例発表として、湘南国際村、三重県、山梨県の各ケースと、そのほかの先進事例について。２日目はワークショップ、又は代わりに、シンポジウムとして、「湘南国際村について」「ＶＩについて」を行い、午後に全体会議を行うという案です。

第３次案に基づき、関係各方面に打診したところ、やはり交通アクセスの問題があり、また、今日の社会状況、職場状況などから各自治体からの集客は難しいと判断しました。

そこで再考した結果、シンポジウム参加者は自治体などの供給サイドに加えて、ユーザーサイドを重視する。そのためにＶＩを供給サイドの発想ではなく、ユーザーサイドの発

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

想プログラム（オン・デマンド）に変えることが必要になってくるのではないか。ユーザーサイドのプログラムに変換すると、「エコ・ミュージアム」という概念から、「自然をテーマに芸術、文芸で表現できるネイチャーライティング」また「ネイチャー・ゲーム」という自然体験教育の二方向で説明できるのではないか。このことは“中心価値の発見と創造”にたどり着くだろう。このことで、ＶＩのコンセプトをユーザーにもわかりやすく説明できるのではないかと考えたわけです。

このシンポジウムでは、オン・デマンドというユーザーが決めていく市場の原理がある。そして総括的な結論として、そのような市場原理の中でＶＩという概念が成立する。中心価値を創造した集客交流産業を、ザルツブルクや湖水地方、ピーター・ラビットなども例に取り上げながら、提案していったらどうかという考え方です。

それに基づいて、第４次案が昨年の１０月にできました。構成として４つのテーマを柱として、シンポジウムを構成してみてはどうか。これはあくまでも案ですが、例えば元ＮＨＫ会長の川口氏にお願いして、テーマ１「夢を創り出す力」（ネイチャーライティングの強い力）ということで、川口さん自身がかつてポーランドの民話をもとにして子供ミュージカルを創作されたわけですが、その創作の力になった意味を講演していただく。

テーマ２「生きた化石、ドウマウス（やまね）のファンタジア」と仮に題して、ドウマウスを主人公にした物語を創作し、自然を考えるとともに、日本発の世界のキャラクターに育て、ドウマウスをテーマにしたネイチャーライティング、ネイチャー・ゲームを公募してみてはどうかという展開例まで、案としては出ています。

テーマ３「ネイチャーライティングの先進事例」。「サウンドオブミュージック」、ナショナルトラストを生んだ「ピーター・ラビット」などが考えられるのではないか。

テーマ４「ネイチャーライティング運動の今後のあり方」。１つは環境に優しい地域振興であること。人の心に夢を思い描ける中心価値を作っていくこと。つまり、「人は夢見るところでなければ、出かけない」のではないかということを、ゲストパネラーなどを招きながら考える。

以上の案を、昨年の１０月に示しましたら、今年１月、なかなか厳しい状況は変わらず、先程、松田先生からお話しいただいたようなかたちで、各自治体などに加え、生活者の視点を持ったエコ・ミュージアムという概念を根底に、ＶＩにおける中心価値の発見と創造ということで、ＶＩのコンセプトを語りかける研究討論を実施し、研究報告書を作成しようということになりました。以上が経緯です。

（松田）　今、お話しいただいたのは、総論の総括のときに議論する一つ一つのトピックスとして、もう一度起こしたらいいと思います。

（小田）　特に最後の概念が今までとは少し違った発想・事例になっているので。

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

（松田）　最後の事例は、ここで派手にやるとなると、いろいろなユーザーを集めなければなりません。そのときにどのような内容でやればいいかということで、このような案も検討したということです。しかし今日は全プロセスのレビューもセッション４で行う、ということでいいと思います。ずっと検討してきて、必然性があってこのように変化してきたわけですから、意味のない変化ではなく、意味のある変化としてとらえて、セッション４の話し合いのトピックスとして取り上げましょう。

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

セッション１　「山中湖の新しい交流人口の創造」

１−１　山中湖の現状と課題

（小田）　先程の小坂井の話に出ていたと思いますが、ハイライフが「山中湖の新しい交流人口の創造」ということで、平成１１年１０月１４日に提案した内容をもう一度説明させていただきます。

山中湖が今抱えている問題としては、観光客数が非常に落ちてきている。それから、一人当りの消費するお金が非常に少なくなりつつあるということです。

山中湖村は、「文学の森」「温泉の森」「花の園」をつくり、ハード、ソフト両面から新しい誘客をするという展開をしてきましたが、やはり落ち込みは続いています。そこで何か新しいソフトや考え方で、新しいお客を誘客できないかということが大きなポイントです。もともと山中湖は別荘地ですが、各企業の保養地も閉鎖しており、圧倒的に日帰りのお客が多いということで、何とかそれをステイしていけるような展開はないだろうかという課題があります。

参考図（巻末資料①参照）は、我々が提案した、今までの世界のリゾート地を見ていったとき、こういう考え方で展開できるのではないかという大きな仮説として挙げたものです。いろいろ交流産業が盛んなところを見ると、外部の人間とそこに住んでいる内部の人間がうまく交流していくものがそこにあります。ほとんど住民が気付かない価値の発見や、別世界・非日常のような新しい価値を外部の人間が発見し、それをクリエーターやプロデューサーが参加し、構成して、そこに物語性ができています。そこから具体的な形態価値として、観光や物語を体験させるための展開が、外部の人間の提案として行われています。

一方、内部の人間から見ると、見慣れた日常の生活や地域の持っている価値を見直す意識が出てきます。当然、お客様を迎えるわけですから、ホストとしての役割の自覚や、内外とのネットワーク、情報の交流なども、もちろん内部の人間の役割です。そこから新しい生活の実践として、ものや情報を新しくしていきながら、生活を革新し、１つのスタイルにつくり上げていきます。

１−２　世界の高質リゾート地の事例

例えば英国湖水地方は犬塚さんがよくご存じですが、イギリスの湖水地方を見ると、ポターやジョン・ラスキンという詩人が、自然環境保護の考え方からイングランドの湖水地方が非常にすばらしいと発見し、それをナショナルトラスト等によって構成しています。『ピーター・ラビット』の本の収益でこれは展開されています。現在はここにホテルや工芸デザイン運動などが展開され、年間１,２００万人という大きな集客になっています。当然、地元のウィリアム・ワーズワースやコールリッジなど、ここに住まれた方の物語の創造なども、交流産業を中心とした現在の展開の基になっています。

ザルツブルクも同じように、『サウンドオブミュージック』で非常に有名ですが、やはり

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

発見・構成・展開があり、中心価値、いわゆるネイチャーライティングや環境を大事にしながら新しい展開をし、そこに産業も生まれ、今は観光と音楽で国際的に有名になりました。

バリ島も古くからの島で、楽園王国と言われていますが、もともとは植民地から始まり、ドイツ人のW・シュピースのバリの絵画などで有名となりましたが、もともと地元民の踊りや衣装がバリに日常的にあったことが重要です。それを今「神々の島」をコンセプトにし、バリ文化を中心としたリゾート地や、伝統的な生活をそのまま残しながら、新しい交流産業を展開しています。インドネシアの国内からでも８０万人、世界からは３００万人以上の人が来ています。

１−３　山中湖の総合的な活性化戦略

山中湖に対しての提案は、現在いろいろなかたちで山中湖が施設やコンセプトを展開しておりますが、第１の提案は、まず価値の発見ということです。今ある資源と新しい交流資源の発見とを考え、新しい価値付けとして山中湖を世界とつながる文化の寄港地として、「しるしの港」という新しいコンセプトを提案させていただきました。「しるし」というのはいろいろな日常的な経験からくるもので、文学も全部「しるし」ということで展開できないだろうかと考えました。

構成に関しては、「しるしの体系化」ということで、富士山にある「富士（不死）の物語」や、山中湖の「かぐや姫伝説」があるわけですが、それらをモチーフにした新しい展開ができないだろうかと考えています。２番目の提案は、富士山の地下の空間（洞窟）が沢山あるのですが、そこに小人が住んでいたという物語のファンタジーが作れないだろうか。

または、ネイチャーライティングとして、日本には二十四節季というすばらしい節季、言葉があるわけですが、それをモチーフにした俳句や短歌を、山中湖発で、先程の「しるし」という言葉を中心にした発信ができないだろうか。これを構成としました。

展開は「想（そう）の高地」ということで、抽象的な概念になっていますが、想像の「想」、思いめぐらす「想」ということで、新しい提案ができないだろうかと考え、山中湖に対しては、先程の交流産業が盛んな地域の価値をそのまま当てはめて、例えば「発見」「構成」「展開」。それから地元の人たちから見れば、「地域意識」「役割意識」「生活確信」ということで、それぞれ１つの仮説として山中湖で展開していった場合、このような考え方が可能ではないかと提案させていただきました。

これはそのときのままなので、当然、抽象的な概念が入っています。もう少し絞り込んでいかなければ、実践していくにはまだ不十分な部分があると思います。

一応、このようなかたちでとらえていくと、日本の交流産業も盛んですが、外国の例えばアスペンにしても、単なる山の中のスキー場が、現在では学術と観光両面で世界的展開になっている。やはり発見・構成・展開をしている。これは松田先生からもお話いただけ

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

ると思いますが、そういうものが全部当てはまっており、大きな概念としてはこういうまとめ方もできるのかということで、提案させていただきました。

（松田）　今の小田さんの話は、最初の総論としてこれを位置づけた方がいいと思います。お手元の資料が今日の最初のプレゼンテーションの枠組みで、これに沿った事例報告として、湖水地方、ザルツブルク、バリ島、山中湖があるという位置づけです。後藤先生もお嬢さんと一緒に湖水地方に行かれているので、ユーザーの立場、ビジターの立場、それからサプライヤーの立場、両方からお話しいただけると思います。犬塚さんも雑誌の編集をやっていてこの地域に詳しいので、総論として位置づけたらどうでしょうか。

そこで各論に入る前に、今の枠組みについて少し話し合い、順次事例に入ってはどうかと思います。この枠組みは、いろいろ苦労して作ったので大切にしたいと思います。

まず、現役で行政の立場にあり、この枠組みを「これはおもしろい」と手塚さんも思われたようなので、まず手塚さんから、この枠組みについて一般論としてのコメントをいただき、そのあと、お３方からいただいて話し合いたいと思います。この枠組みについて、ここをこうしたらいい、ああしたらいいということを含めてお話しいただきたい。

１−４　枠組みについて

（手塚）　本日は、このような機会を与えていただき、本当にありがとうございます。

この資料のプロセスにつきましては、提案していただいたときから、非常によく整理されていると思っています。通常は発見・構成・展開という組み立てがなかなかできない。それから、地域意識・役割意識を持って「生活を確信」することができない。というよりも、今の段階で地域振興を図っていく手法、地域経営の手法が、山梨県だけではなく、日本全体で確立されていないと思います。こうした状況で、きちんと整理して実行することは難しいのかもしれません。しかしながら、今、全国で地域活性化と言いますが、一体地域活性化とは何なのか、きちんと整理することなく進められている状況ですので、こうした体系化が一層必要とされているところです。

多くの地域で、「うちの村は・・・どうも元気がなくて。」と言いますが、では「いったい何が不満なのか」と聞くと、具体的な回答が出てこないのが現実です。地域がどのようになればいいかと尋ねても、具体的にはわからないということが多いのです。ただ、未だに、ぼんやりと地域の人たちのイメージにあるものは、大きなインフラがブルドーザーの音とともにやってくることではないでしょうか。人間は、それではいけないと思いながらも、そういう経験を一度してしまうと、なかなかそこから離れられないのが現実です。

ご提案の、「発見・構成・展開」という体系は、外部から見ると、「発見」ですが、一方、地域の人から見ると、自分たちのところがどういうところなのかを、「見直す」ということです。このプロセスを地域経営に当てはめるとき、実際にはどのように進めていくべきなのか、ということを、是非山梨県のどこかで実践してみたいというのが、このご提案をい

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

ただいたときの率直な感想です。
　同時に、これは山中湖村には少し失礼な言い方かもしれませんが、山中湖のように、好むと好まざるとにかかわらず、「富士山」という世界的なものが目前にあるために、あまりに外部の圧力が大きい地域では、それに押しつぶされてこのとおりスムーズに進まない場面が出てくるのではないかと思います。そこで、最終的にはこのプロデュースの手法が山中湖を目標にするにしても、テスト的に別の地域で進めていきたいと思いますので、またサジェスチョンをいただければありがたいと思います。

（松田）　今の手塚さんの話について、やはり知的民度がある水準まで来なければ、この枠組みは理解されません。東京から行くお客さんが、寝泊まりをしたり食事をもらったりするサービスは、これまでも地元から受けているわけですが、東京から来るお客さんと地元の人たちが、精神的なテーマで交流をするという経験が全くないために、ギャップが生じていて、とても難しいと思います。
　これは山中湖の事例で話し合えばいいのですが、ここにある成功事例のように、これを乗り越えたところだけがうまくいっているのではないでしょうか。その辺はいかがですか。

（後藤）　もともと、ある地域で暮らしている人だけの経験で地域おこしを図ろうとしても、どこかで限界にぶつかるだろうと思います。むしろ、そこへ多彩な人に訪ねてもらい、そういう人たちの目や力も借りて、一緒に、もともとの住民と外来者との共同作業で地域をよくしていこうという発想だと思います。それがビジティング・インダストリーを発想していく際の基盤ではないか。その範囲でよく整理がされていると思います。枠組みとしては、ライジングしていくものだと評価できると思います。
　しかし、実際に地域を訪れたり、よそから住み着いたりすると、基本的に外の人を受け入れる体質があるのかないのか、ということに突き当たります。少し冷たいかもしれませんが、やはりはねのけるというか、入り込ませない。あるところまではいいのですが、本当に入った場合に、「異分子は嫌だ」という感覚があちらこちらに残っています。
　では、自分たちだけでごく普通の生活の質が高くて品位があり、それを反映して町並みも自然も美しくなっているのかどうか。冷酷に言うと「何となく補助金で食べているのではないか」という感じがしてしまいます。補助金でやっていることは単純な土木事業です。あるいは画一的で、フラワーセンターを造るといえば、山梨県のあらゆる町でフラワーセンターを造ろうという話です。維持管理をどうするかはわかりませんが、山中はあっという間に、もとの雑草の原っぱに戻ってしまいます。
　では、「よそ者もひどいではないか」という話も出るかもしれませんが、それもそうです。しかし、私も小淵沢に拠点を持っていますが、周りの道路際の草むらや川に架かる橋から、非常にいろいろなものが捨てられています。お金以外は何でも拾えるくらい、捨ててあります。一番ひどいのは空き缶、次がプラスチックやビニールのゴミです。これは必ずしも

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

外来者とは限りません。「若い人たちが外から車で来て、捨てていく」と町の人は言いますが、拾ってみるとそうとばかりはいえません。明らかにどこかの家でご老人が亡くなると、布団ぐるみ、本人の遺体以外はすべて捨てていくということですから、町の人も捨てているのです。水に流すという習慣ですから、昔は赤ん坊まで水に流していたわけです。しかし、今のものは水に流せない、土に返せない。

よく考えていくと、最後は水に流せない、土に返らないものを作る製造者が悪いという話になりますが、捨てるという場面では、自分の住んでいる地域を、普段の生活の中で、誇りを持ってお客さんを迎えるような気持ち、ホスピタリティになり、かつきれいにしているか。これについて、かなり厳しくそれぞれの地域の人が反省もし、実際によそから来た人も地域の人も、ゴミは自分で拾う。あるいは、自治体が税金を使ってゴミを集めるのはどうか、ということも難しい問題だと思います。最初、私はあまりいいことだとは思いませんでしたが、やはり自治体としては、罰則付きで「ポイ捨て条例」などが必要なのかということもあります。それは、本当はボランティアやナショナルトラストなどでやってもいいのかもしれません。

いずれにしても、やはり少し荒れていると思います。この荒れたままでは人は来ない気がします。風景が荒れているということは、心も荒れているし、生活自体が、規律がない、品がないことになるので、ここをどうするかだと思います。余所者が行った地域を大事にしないこともあります。何のために行くのかよくわからず、あるところに魅力を感じ、気に入って、そこへ行ってよかったと。こういうところは大事にして、自分のところへ帰っても、そこを見習って、もう少し自分のところもよくしようと思うかどうかです。いる方も行く方も、国民の道徳などという本を書くつもりはありませんが、もう少し市民として、自分の規律がいるのではないでしょうか。

イギリス湖水地方も、外向きの見せびらかすものではなく、普段の生活の中で自分の地域をきちんとしていくことで、行ってみたくなるのではないかと思います。食べ物でも、特別にごちそうが出るわけではなく、紅茶とスコーンくらいしかありませんが、それがまたおいしかったり、野菜がおいしかったりということです。そのように普段の生活をきちんとして、いつ人様が入ってきてもお見せできるようにしておけるかどうかだと思います。

もう１つ、補助金行政がある地域で救える家は、跡取りの部分だけです。現在は長男かどうかはわかりませんが、補助金で数人の兄弟全部の生活を見るわけにはいきません。そこの地域に住む跡取りしか見られないわけです。それに頼って生きていると、弟や妹、兄さんやおじさんは、みんなその村から出て行ってしまいます。そしてご本家の長男が残る。そこへお嫁さんが来て「こんなところは嫌だ」と言っていなくなると、その家は、子どもができなければそこでつぶれてしまいます。このような補助金に頼った生活は、やめなければいけません。若い人がいなくなってしまいます。それは田舎の村だけを言っているのではなくて、大都会のど真ん中の商店街が全く同じように、ひどいことになっています。

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

（手塚）　今の点に関して１点だけよろしいでしょうか。後藤先生も小田さんも小淵沢に固定資産税を払っていただいており、大変ありがとうございます（笑）。

そんなことだからではありませんが、実は八ヶ岳周辺で「八ヶ岳高原活性化研究会」という NPO が活動しています。これは八ヶ岳南麓の４町村に住んでいる人たちで構成する、八ヶ岳高原の環境を守りながら、どう地域を活性化するか、について研究と実践を行う団体で、発足して約３年になります。いろいろな人が入っていますが、回を重ねるごとに純粋ネイティブの人が少なくなり、山梨県が本籍の人はほとんどいないのではないかと思います。それは今、後藤先生がおっしゃったように、交流ではなく、まだ対立があり、外と内との関係がうまくいっていないのではないかと感じます。

それを議論すると、そのことだけで１日、２日しなければなりませんが、とりあえず次のように考えています。

子供のころから中学・高校まで「何々ちゃん、何々ちゃん」と簡単に呼び合ってきた人たちが、たまたま進学や就職で別の地域へ行き、何年かたってまた戻ってきたときに、昔「何々ちゃん」と呼び合った人と会って話をする場合と、異なる地域からきた人で全く接点がなかった人と話をするのとでは、全く感覚が異なるのだと思います。少なくとも、日本の社会の基本には、そういうことがあるのではないかと感じています。それに絶望してはいけないのですが、そういうコミュニティそのもののあり方は一度整理しなければいけないと感じています。地元の人間としては、後藤先生がおっしゃったことを、反省する必要があるのだと思いますが、一方で、日本のコミュニティ自体がどのような特質を持っているのか、議論しておかなくてはならないと思いました。

さて、日本でも、欧州の制度を見習って、中山間地域の農家等への直接所得保障制度が導入されました。元々、ドイツやイギリスのようなところでは、条件不利地域対策として農家に直接所得保障を行っています。国民的な財産である美しい農村を維持するために行っていますが、一方、現状では、日本の農村は決してきれいではない。このため、現段階では補助金に頼る部分がまだ大きく、直接所得保障制度導入はまだ早いのではないかと感じています。

ただ、興味深かったのは、松田先生も教えてらっしゃる立教大学の観光学部に、韓国からの留学生が相当在籍していて、彼らが清里に来られたときに、「日本の農村はこんなにきれいなのか。」と感じたということです。韓国に行くと、まだソウルあたりはいいのかもしれませんが、少し地方部に入ると、環境水準はまだ低いとのことです。

この例をみると、戦後、わずかながらでも進歩はあったのかなと感じます。こうした農村景観の問題にこれからどのように対処していくのか、また、先程のコミュニティの問題と併せて、このステップボードに出ているコンセプトをどのように導入していくかを考える必要があると感じています。

（松田）　それでは中田さん、犬塚さんの順でお願いします。

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

（中田）　私は、湖水地方、ザルツブルクのように、一種の地域づくりの戦略のようなものがビジターズ・インダストリーに必要であると思います。

例えば「発見」「地域意識」にとっては、ふるさと学習なり、コミュニティ学習なりが、その前提となります。自分たちで地域の美しさや地域のエピソードを拾い上げてみると、風景もさまざまに見えてくるはずです。ですから、このような学習がなされている地域は、今とても元気です。

ただ、生活の場所、馴れ親しんだ風景を見直すということは容易ではない。ここで、外からやって来たクリエーターの参加や、よその人の参加、あるいは訪問者の目から見て何かを発見しようという意識も重要だと思います。次にある種の制度化といったものが課題となります。例えばイングランド地方では、ナショナルトラスト運動を『ピーター・ラビット』の著作権の収益によって展開するといった、一種の制度化です。ザルツブルクは、おそらく「サウンドオブミュージック」の前に、「ザルツブルク・フェスティバル」の開催という制度化が行われたわけです。ですから、先程の後藤先生の話に出てきた「まちなみ条例」なども一種の制度化だとは思いますが、ある種の制度化という戦略が、ＶＩにとって課題になると思います。

この制度化のプロセスには、一種のコーポレーションが必要になります。ボランティアづくりや、様々なパートナーシップといった運動組織を、いかに起こすかという具体的な課題も含まれると思います。このようにこの図式を地域づくりの戦略としてとらえることができるという印象を持ちました。

（犬塚）　私は、今日はＩＴネットワークについて少し発言しろと言われましたので、そういう点でこの図式を読み直したいと思います。

この図式では、外部・内部とありますが、それは「都（みやこ）の価値観（みやび）で鄙（ひな）を見い出す」という構造でもあります。地方の価値について、日本では伝統的に都人（みやこびと）の価値観で鄙を価値付けることを繰り返してきたわけです。この構造に対してどのように取り組むかがテーマとなると思います。今日のネットワークという観点からこれを見直してみます。ネットワーク社会の進展とは、一面で技術が非常に進展していることであり、他面では意識が急に変わってきているということです。

その意味では、「都と鄙」という構造も、意識の変化の面から捉えなおす必要があります。一般には従来、上流・下流と見られていたものについて、ネットワーク構造による逆転や循環が、産業のいろいろな面や生活面でも起きてきています。さて、「都から地方へ」に対して、逆に「地方から都へ」戻すという方向が考えられます。地方にも価値があり、都の人たちが価値交流をするためにそこに来るという構造です。

先程、手塚さんから、地方には、そうはいいながらも外部を入れないかぎり無理だということ、こういう価値が必要だということすら気づかないという現状の話がありました。

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

ネットワーク社会が目指すものは、まさにそこの部分を変えることだと思います。地方に住んでいる人は、地方の人としか交流を持てないのか。つまり意識が地方に限られるのか、１つの例を安曇野にみることができます。安曇野地域の価値は、もちろん文芸の人たちによって発見されたものもありますが、今、それを交流させている場のひとつがネットです。インターネット上で、日本中のいろいろな人が安曇野の生活価値について、自分なりの意見をどんどん発表しています。これは地方についての話としては、大きな数でしょう。

それは文学の価値といった華々しい価値ではなく、普通の暮らしの価値です。都市の生活者が暮らしの価値について考えていくとき、一つの姿を安曇野に見ていて、「この間夏に行ってきたけれども、こんなふうだった」と日記のように書いています。一方、安曇野のペンションの人たちがそれに応えようと、公的なネットワークインフラの未整備に反して、無線などを利用したネットワークを自分たちで作りました。そのように市民レベルで、どこに住んでいるかは関係なく、生活の価値を生み出すようなネットワークが生まれつつあります。そこから発信されるものが、今度は都の方へ向かっているのではないかと思います。

この構造を現代ふうに見直すと、必ずしも空間的に外・内という感じではなく、ネットワーク社会はもう少し複雑化して、都と地方では地方のところに、むしろ生活を整えるとか、普段のものがすばらしい価値だというところにおいて、空間を越えてつながっていくところがあるのではないでしょうか。地方の価値を起点として、どこに住んでいるかに関わりなく、ネット上でその価値を確認し合い認識を深める。そこから都の人たちに価値を循環させていくということが、構造的にあるのではないかと思いました。

もう１点は、手塚さんが地方について使われた「きれいかどうか」という言葉についてです。このような問題を考えるときのキーワードとしては、「きれい」と、もう１つは「美しい」ことを、別立てで考える必要があると思います。「きれい」というのは、日本語で言うと、わりと新しい、モダンな感じで整えたものを対象とするものではないでしょうか。例えば幾何学的に構成されたものです。地方の田園地帯に行って、そこに住んでいる人たちが「きれいになりました」と言うのは何かというと、用水がコンクリート舗装されたことだったりします。しかし、それを「美しい」とは言いません。美しいというのは、むしろ舗装されていなくて、土で雑草が生えているようなものでしょう。そのあたりの生活の価値観を、もう一度見直していくような方向性で、地方の問題、ビジターズ・インダストリーを考えるといいのではないか、そのあたりの言葉と価値観についても、整理する必要があるのではないかと思います。

（松田）　公徳心と環境の問題、それから普段の生活の魅力をお見せして、やって来る人に楽しんでいただく。それから、補助金行政の限界について、もうそろそろ気づかなければならない。中田さんからは、戦略・戦術・制度化も、合わせてこの枠組みに関連させたい。それから犬塚さんの方からは、今はネットワークの時代で、技術だけが進歩している

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

のではなく、意識も変わってきており、従来の意識ではない。それから言葉の問題。このようないくつかの視点を、小田さんの枠組みに出していただきました。

次に、英国湖水地方については、ショートレクチャーを犬塚さんと後藤先生に１５分ずつくらいお願いしたいと思います。それからザルツブルクについては、背景も含めて中田さんがかつて十分調べてあるということなので（笑）、２０分くらい話していただきます。

バリ島については、特にここで調べている人はいませんが、聖なる生活、俗なる生活がバリ島に残っていて、聖と俗がなくなった現代社会の人々が、ここに魅力を感じているという話を少しして、それから議論を行います。それから山中湖だけではなく、山梨の全体の地域について手塚さんに話をしていただき、また議論という段取りでいきたいと思います。

では、総論は一応、これで終えて、次は各論に行きます。

１−５　世界の高質リゾート地：事例発表

（松田）　それでは総論を終えて、次は各論で英国湖水地方とザルツブルグ、バリ島までの３つをリレーします。取材ということでかなり詳しく調べたとも聞いているので、最初に犬塚さん、それからお嬢さんと一緒に湖水地方を旅したという、楽しむ方のサイトと楽しみながら行政のあり方、環境保護の問題も見て来られた後藤先生にそれぞれ伺いたいと思います。最初にお２人から１５分をめどに、自然の流れでオーバーするときはしてください。それではお願いします。

ａ．英国湖水地方

（犬塚）　まず地域的なところから始めますと、イギリス本土には、南北ではイングランドとスコットランドの別があります。自然環境という意味では、北のスコットランドに行くと森林があり、さらに北に行くと大きな木が生えない灌木だけの地になってしまいます。

イングランドは、スコットランドに比べるとずっと整地が行き届いていて、どこに行っても耕作地です。湖水地方はその間くらいのイメージで、本当の意味での森林は残っていませんが、耕作地でありながら、自然の豊かさを感じさせる部分があるところです。しかし緯度的には北極圏にもあたり、樹木性は乏しいところです。では、そういう地域になぜみんなが来るかというと、象徴的なのはその地に住んだラスキンがどのような運動に奔走したかということに表れるでしょう。１つは文芸の運動ですが、もう１つは自然保護の運動です。イギリスは産業革命と鉄道の発達で有名ですが、湖水地方まで鉄道を入れることに対して、ラスキンが反対運動を始めたことが有名です。そしてそのことが、今日の湖水地方の存在のあり方を決定づけたと言われています。

湖水地方といっても実際にはかなり広く、入り口にあたるのは「ポターの里」で有名なウィンダシアでしょう。そのあたりの町は、造りは現代的建築でも、外装を昔風の石を壁面に並べるなど、昔風の町並がつくられています。ポターの時代の農耕を主体とした風景

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

が残っているのを見て回るのが主な遊びでしょう。

そこから少し北へ行くとグラスミアというところがあり、ラスキンとワーズワースゆかりの地です。急に雰囲気が変わり、町並は静かに緑も濃くなります。ラスキンが守りたいとか、ワーズワースが歌に歌ったようなところは、グラスミアから北の方がよりはっきりするでしょう。そのあたりの遊び方としては、外を歩く、山を歩くというかたちがあります。「ワーズワースホテル」や「スワンホテル」、Ｂ＆Ｂなどに泊まり、町のお店でアウトドアの服装に整えて、ワーズワースが歩いていったような山を歩きます。大体、１週間や１０日いると、ほとんどの日が曇りで驟雨（しゅうう）があるような感じですから、いわゆるイギリスの天候をからだで楽しむことができます。地形や植物は日本のように複雑なことはなくて単純なものですが、それでも小さな山の織りなす風景や、オークのような複雑な枝を見ながら行くのは気持ちのよいものです。

そこからさらに北、あるいは東、西の方へ行くと湖水地方のダイナミックな面が現れ、山岳はかなり歩く人でなければ楽しめない感じ、３日４日は歩く旅となります。しかし険しい山ではなく、釣りの遊びをしている人たちも多く、ランドローバーやレンジローバーというアウトドア系の車で来て、釣りをして帰っていくという楽しみ方をしています。

イギリスに暮らす人たちにとっては、郊外や田舎で遊ぶことが、都市のライフスタイルにも必要とされているようです。よく皇太子が膝までの長靴を履き、フィールドジャケットを着て歩くという写真を見ますが、ひとつの伝統でしょう。

そのようなタイプの楽しみ方を、農作業や農村風景についてはポターが絵本にかき、山の少し厳しい自然環境の中で、人生の暗さと価値を感じるという面では、ワーズワースが詩においてやり、絵画として楽しむという点ではラスキンが示した、そういう意味で、いくつかの異なる分野を通してライフスタイルの描き方がなされた場所といえるでしょう。

イギリス人はご承知のとおり、ものすごく車好きの国民で、しかも平均的なレベルでドライバーがかなりスピードを出す国です。道はやたらに狭いのですが、そこをみんなが飛ばしています。湖水地方も現状では車が多く、鉄道は来ていなくても、車の音はものすごいものです。そういったことをどのように整理するかという点では、村々の入り口にかなり大きい駐車場を造っているようです。村の入り口のところで車を止めてしまい、そこから中に歩いて人が入るかたちにしているように私は思いました。以上が私の印象です。

（松田）　それでは引き続き、後藤先生、お願いします。

（後藤）　私も何年に行ったのか、だいぶ前なので記憶もあいまいになってきていますが、湖水地方は、今お話のあったようにイングランドの一番北です。イングランドは平原で、湖水地方まで行くと山があり、それを越すとスコットランドになります。こちら側はウェールズになります。

イギリスというのは、ご承知のように今でも連合王国（United Kingdom）で、いくつか

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

の王国の連邦体です。グレイトブリテン島の中に、イングランド、スコットランド、ウェールズがあり、隣のアイルランドの３分の１が北アイルランドで、その４つの王国が連合してイギリスになっています。サッカーなどでも、ヨーロッパ選手権ではウェールズとイングランドは全然違うチームです。今の労働党内閣になってから分権化が進み、スコットランドも一応自立をして、別の政府もできてきました。

そういう中で、イングランドの一番北の端にあり、イングランドの人にとっての田園生活の場所で、そこに住んでいる人たちは田園の中で暮らしています。田園といっても昔、教科書などでエンクロージャー（囲い込み）というのがあり、イギリスが世界に冠たる国になっていく過程で、地主たちが羊の牧草地に農民たちを囲い込んだのですが、その囲い込んだ跡がはっきりわかるところです。その囲い込んだ柵の石垣がなかなかおもしろく、日本のお城に似ているところがあります。

それから、今のイギリスはアングロサクソン系、ゲルマン系が来て、そのあとノルマンディーが来てといろいろ複雑ですが、そのはるか昔はケルト人の土地であり、ケルトの文化を今でもウェールズは持っていると思います。イングランドの中ではケルトの軌跡があり、十字架も、ケルトのクロスは少し違います。そのように文化的には非常に古いところです。地質学上、カンブリア期がありますが、湖水地方の辺はカンブリアと言い、地層まで言えば相当古い土地です。そのような古いところと最近の歴史を含めて、一種独特の地方になっています。

そこへ、うちの娘の方はピーター・ラビットの丘に行こうというので行ったのですが、私の方はラスキンなど、イギリスの作家たちの愛したところに行きました。ラスキンは近現代を否定して中世のよさを再発見した人で、その弟子のウィリアム・モリスという人が私は好きです。ブックデザインの人で、「モリスの法則」という、１ページの中で、上・下・左右の余白をどのような比率でとるかという法則を作った人です。そのような活字のデザインもやるし、紙も作るし絵も描き、詩も作るし、ケルトや北ヨーロッパの原語の詩の翻訳などいろいろやっている人です。そのような人たちが、現代文明批判を秘めながら愛した土地だというので、行ってみたかったのです。なかなかおもしろいところで、由緒あるところです。

湖水地方は全体が庭園のようになっています。「ガーデン」といい、本当に庭師の技が入っていて自然ではありませんが、先程の言葉で言うと「きれい」というよりは「美しい」、楽しいところでもあります。ＳＬが走ったり、湖水を渡る船が発達していたり、囲い込んだ牧場の中を人間が歩く道も通っており、いろいろな楽しみ方があります。

車は、確かにすごい勢いで曲がりくねっていきます。大型バスなどは、どこかで入れなくなってしまったりします。なかなか日本ではありません。私はいわゆるエコロジストと少し違うので、全く自然を放っておけというのはありません。自然に王冠をかぶせるというか、人間も自然の一部で、生きていくために自然を壊すわけで、どうせ自然を壊さなければならないのなら、美しく再生できるように節度を持って壊さなければならない。壊し

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

っぱなしはいけないし、放っておくわけにもいかない。人間の手が入り、かつ自然の要素は入れて、人間が目にしても美しい。そして野性の動物にとっても住みやすいところになっています。そこが１つの点だと思いました。

（松田）　少し私の方からも関連で話をさせていただき、それからダイアローグとしましょう。

実践女子大学に生活文化学科ができ、卒業論文のテーマに『ピーター・ラビット』の故郷を選んだ学生がいました。そのあとＮＨＫが『ピーター・ラビット』のすごくいい映像を作ってくれて、その２つを関連して、これまで何度か見ていただきました。

卒業論文についてまず話すと、都会で育つとどうしても自然がありません。そして親が疑似自然として『ピーター・ラビット』のキャラクターグッズで小さいときから育て上げ、小学校、中学校に上がると、その物語に動機づけられる。そして高等学校で英文に動機づけられ、大学に入ったら湖水地方を訪ねて行く。実際に２回訪ねるのですが、訪ねてみると、絵本の世界で知った風景が非常によく保存されていて、現にそれを観光のプログラムにして、皆さん家族で楽しんでいる。そこで、親しんできたキャラクターグッズも、その中からナショナルトラストの基金ができていることを知ります。自分が小さいときから知らずに自然環境保護にかかわっていた。そのことは、ディズニーランドのキャラクターグッズを買ってもらうよりも、ずっと意味のあることを親がしてくれていたのです。絵本やキャラクターグッズの収益も環境保護の基金になっており、ここで初めて自然環境保護の運動を民活で行うことができるのだと知り、このような考え方は日本でどのようにすれば可能か、というテーマで卒業論文を書きました。

ビアトリクス・ポターさんが来る前や、さらにその前はどうだったかというと、やはり湖水地方の近くで生まれたワーズワースがまた湖水地方に戻り、詩人たちがそこに住む。その中に友達のコールリッジもいました。この人たちが、やはり最初なのでしょう。ピーター・ミルワード先生の話を聞くと、どうもそのようです。

ワーズワースとコールリッジはどのような立場の詩人かというと、この宇宙、地球、自然の世界は、生き物だという考え方を持った人たちです。地球は宇宙が誕生時点に生き物として始まった。ですから、基本的な進化のプログラムは誕生時点に出来上がっていて、それが宇宙の生命力で潜在プログラムが顕在化してきたという、神秘的な進化論者です。ですから、ダーウィンの機械説の進化論とは違うわけです。その流れの源流をさかのぼればプラトンまで行きます。

この人たちの詩によって、まず都市で自然欠乏症にかかっていた人たちがワーズワースの世界に動機づけられていきます。そして詩人たちがそこに集まり、ワーズワースの作品は非常に強く、都市の人々への動機づけをしました。

ジョン・ラスキンにしてもウィリアム・モリスにしても、この人たちも非常にその時代強い影響力の顔を持った人たちで、この人たちがまた湖水地方を大切にします。それから、

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

ビアトリクス・ポターの『ピーター・ラビット』が一気に大衆化した顔をつくります。
　湖水地方そのものが、このような詩人たちにインスピレーションを与えて作品を作らせたということがまずあり、それらの作品を通じてこれらの詩人たちが、湖水地方で感じ取った世界を、ツーリストたちがその世界で遊び、感じることができる。つまり、作品を通じてそこを訪れ、その作品を作った人たちが、自然の世界に感じた精神世界をツーリストたちも感じ取り、参加することができる。そういうことで、先程の旅人がやって来ることと、地元の人たちというところの、非常に知性ではハイレベルのところからスタートすることができました。
　かつ、イギリスという国柄もあり、このような観光地が成長しやすいという背景もあったと思います。しかし、ワイルドな自然に上手に折り合いをつけ、そしてエコロジカルな制御とも折り合いを上手につけながら今日に来ています。「自然を使わせてもらう」というところに discipline があるところがすごいところです。それがあるとない観光開発は、結果においてものすごく違ってきます。それが非常に日本に欠けている視点で、日本の観光開発、テーマパークやリゾート開発がことごとく失敗してきているのは、この理念と discipline がなかったことだと思います。湖水地方には、まだまだ日本が学ばなければならない、いろいろなソフトがあるのではないかと思います。
　３人で大体１０分くらいずつ話をさせていただき、議論していきましょう。
　中田さんは、湖水地方は行かれましたか。

（中田）　イングランドでは、リバプールまでは行ったことがありますが、湖水地方はわかりません。よく多チャンネルのテレビなどを見ますと、ワイズ島などがありますね。

（松田）　それはスコットランドの方でしょう。

（中田）　北部地方の自然は荒涼としていますが、それはそれでイギリス人には人気があるという印象を持ちました。ことばを換えて言えば、観光以外には、ほとんど利用しようがないのではないでしょうか。

（犬塚）　上は、スコティッシュ・ウィスキーがありますから。

（中田）　ただ、今聞いていて、なぜここでナショナルトラスト運動が始まったのかがわからないのですが。

（松田）　事実について話すと、ビアトリクス・ポターがピーター・ラビットを描いた直後くらいに、鉄道をそこに引こうということになったのです。そこの地元にいる人たち、さらに牧師さんが、何としても食い止めなければならないと考えます。その牧師さんとポ

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

ターさんがもともとお友達で、それに心を打たれてポターさんが、それでは私の本の売上を使いましょうと。さらに派生して、キャラクターグッズの売上もその基金にしましょうと。そのパートナーシップで基金が集まり、それがナショナルトラストになったということです。

（後藤）　それと一緒に、要するに守りたいところを買い取ってしまい、コテージなども建てる。その運動が、そういうものを管理しているのです。役所が管理しているのではなくて。

（犬塚）　英国中にものすごい数のプロパティがありますね。

（松田）　全イギリス国土の１００分の１を、ナショナルトラストが持っているそうです。

（後藤）　国立基金というより、国民基金・市民基金という感じです。

（松田）　イギリスでは、このような国柄がありました。フランスの国会で、外来語がフランスにたくさん入ってくるので、何とかきちんとしようといい、国立でフランス語のあり方を検討する委員会を作りました。イギリスでも同じようなことが問題になったときに、マクミランの事典ではどうなっているかというと、「すごく整備された辞書ができています」と言うと、「では、それでいいじゃないか」と言ったという話があります。それは、民間企業のやったことでうまくいっていれば、国が出ることはないのではないかと。国語の問題においてすら、そうなのです。ですから、いろいろな歴史を持ったイギリスであっても、市民のムーブメントを非常に大切にする国柄です。ですから、パブリックスクールなどというと、我々は公立の学校だと思っている人は非常に多いですが、私立なのです。パブリックという概念は、私立である。それを案外知らない人が多いのではないか。

（中田）　もう１つよろしいでしょうか。犬塚さんにお聞きしたいのですが、よくイタリアなどのリゾートでは、例えば冬場はやらないとか、２～３か月休んでしまうというのがあるのですが、この辺はどうなのでしょうか。

（犬塚）　やはり夏が主体です。緯度が高く、真夏は夜 10 時くらいまで明るいのです。一方、冬はクローズのところが多いようです。

（中田）　クローズですか。その間は、このようなビジターズ・インダストリーにかかわる人たちはどうしているのでしょうか。

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

（犬塚）　ここではやっていないのですね。

（松田）　夏の収入で暮らせるようになっています。それは、ストックがあるというのが１つあります。今、日本でも案外そうなってきています。ストックができたところでは、夏場の経営だけで冬場休んでいるところも結構あります。それで通年で食べている人たちが出てきています。

（中田）　きっとそこの意識改革でしょうね。大きな問題は、このような自然地域にあるところでは、どう地域経営するかというあたりでしょう。

（犬塚）　ナショナルトラストのプロパティと、それに付随して営業しているところとの違いはあるでしょうね。ナショナルトラストのプロパティは、ものすごくビジネスライクに運営されています。ナショナルトラストの成功は、広報やマネジメントのビジネスシステムがすごくしっかりしていることにあるのではないでしょうか。何かやるたびに財務計画がきちんといくようにする。そこで働く人たちに対する人件費や、地域の野菜などの物産の売上についても、計画をかなり精密に出し、その結果を公表する。結果的に組織体・事業体として非常に運営がうまくいっているので、専任スタッフに高い給与も払えるのです。

例えばこのプロパティは何月何日から何月何日までオープンすると決めると、それについて必要な人員をどのように確保するか、年間計画を立てるわけです。湖水地方だけでも数十のプロパティがあり、それに対して一般のホテルやアウトドアショップ、お土産物屋があるというかたちです。地元の運営だけでなく、シーズンのときだけやって来てビジネスをすることも多いようです。

（中田）　レジャーレクリエーション体験の、サービスはやっているのですか。

（犬塚）　観光プログラムはたくさんあるようですが、ポターのウィンダミアと、近くのアンブルサイドあたりに集中しているのではないでしょうか。それ以外は、やはりヨーロッパ人の観光地ですから、自分で来て自分で歩くというかたちでしょう。ラスキンやワーズワースの家など、数としては日本人の訪れているパーセンテージは少なく、日本人は一部集中、限定型だと思います。

また別の面では、湖水地方に行くことと、コッツウォルあたりが、イギリスの都市の人たちにとっては同じようにバランスがとれたところがあるように思えます。コッツウォルには、都に対して、まさしく田舎のひなびた美しさがあります。大体ロンドンから２時間か３時間で道を歩いていればウサギが飛び出すようなところに来てしまうわけですから、やはり人気があります。

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

湖水地方は、それよりももう少しワイルドな感じのところといった感じでしょうか。景観が、日本で言うと鹿児島のようで、突然、風景が変わります。県境を越えるととたんに日本でなくなったという感じの風景に似て、急にイングランドではなくなったような風景になってしまうところが、エキゾティックでおもしろいのではないでしょうか。

また、ラスキンやターナーは、絵画において自然を描くという価値を見いだした人物です。つまり、イギリスの人にとってはあまり魅力がなかった山の風景をそのまま描き出すことのおもしろさ。そのような新しい価値観、認識を作り出した人が、愛した土地なのです。

いわゆるイングリッシュ・ガーデンとフレンチ・ガーデンとの違いがよく言われます。非常に整形したものと、見た目は乱雑でとんでもないような感じ。しかし、イングリッシュ・ガーデンは、見た目には、日本人にとってもあまりにも粗雑にやっているように一見見えますが、実はガーデナーの努力が見えないところに大変多くそそぎこまれています。例えば「ワーズワースの庭園」は有名なイングリッシュ・ガーデンですが、そこを今管理しているガーデナーは、どのようなコンセプトで庭づくりをしているか。植え込みに今美しいものをつくっています。それがワーズワースだったら、どのようにこの中をつくっていくだろうかと、いつも問い直しながら庭づくりをすると言います。イングリッシュ・ガーデンは固定化されず、次々に変わるわけです。最初に決められたガーデンプランに沿ってそのとおりに再現していくのと違い、今の気候に応じて、今ある草花を、バックヤードの植物園から持ってきて、植え込んでいくわけです。ある庭の個有のコンセプトに基づいて、実際のかたちを柔軟に整えてゆく。その植え込みのしかたが、イングリッシュ・ガーデンの考え方です。そういう自然に身についた見方を決定したのが、ラスキンやワーズワースの時代に象徴されていることだと思います。

（中田）　そうすると、庭園の管理に庭師さんが入っているわけですね。

（犬塚）　そうです。実際、歴史的に見ても、自然庭園の発見がイギリスの文化の中になされるのがこのころで、この国はもともと自然に対しては収奪の発想の強いところなわけです。ほとんど昔は森林が多かったらしいですが、今、イギリスで森林があまりないのは、彼らが海洋王国で、船に全部使ってしまったからだとも言われています。

それに対して、「ありのままの自然に価値がある。枯れた木に価値がある」という感覚を見いだしていくというのが、イギリスの庭園史の中にあります。それと文化史的な発見の一致をみることができるでしょう。

（松田）　イギリスの農夫は庭師で、イギリス人が全員、庭師だと言う人もいます。一見手を入れたとわからないものに、徹底的に手を入れる。

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

（手塚）　引退して自分で手を入れるのが最大の楽しみという感じで、庭園をいじります。

（犬塚）　加藤秀俊さんがイギリス留学したころの本がありますが、おもしろいのです。彼が庭付きの一軒家を借り、忙しいので庭の手入れをしていないと、隣の人がやって来て「ミスター・カトウ、これはいったい何が起こっているのだ」。つまり、庭の管理をすることはパブリックな行為なのです。自分の庭は外に対して責任があるという発想があるらしいのです。それが自分の楽しみでもあるし、社会に生きる人の責任でもあるわけです。それが、先生のおっしゃった「農民もガーデナー」というものだと思います。

（松田）　自然（nature）を、山、川、木、林、森と理解したのは１８世紀の半ば以降で、nature という概念は、「人間の本性」という意味で長い間使われていた。我々が言う自然現象の nature に使うようになったのは、１８世紀の半ばぐらいからです。そのリーダーになった人がワーズワースで、非常に早いリーダーの１人だったのです。

ジェントルマンズ・ガードナーという、紳士階級（ジェントルマン）がスカラーであったりペインターであったり、いろいろな分野に出ていくわけですが、庭というのは教養科目のようなものです。インテリというかジェントルマンの人たちが、ガーデニングに夫婦で関心を持っていきます。

歴史からすると、日本の方が庭づくりというのは長い伝統を持っているわけですが、都市の産業革命で自然がなくなってから、どっと国民全体が自然に関心を持ち、いつも身近にガーデニングというライフスタイルを大切にしています。日本ではそこまで、日本庭園を大切にしてきたわりには、国民一人一人のライフスタイルにならなかったかもしれない。

手塚さんも湖水地方に行かれたので、ここでまとめていただいて、次のザルツブルクに移りたいと思います。行政の立場から湖水地方をどのように見てきたのか、そして今の話を締めくくってください。

（手塚）　まとめることはできませんが、１つは、先ほど犬塚さんも車の話をされていましたが、そういうイメージはすごくありました。あとでザルツブルクの話を中田さんにしていただければ、たぶんオーストリアやドイツの環境保護や環境ツーリズムと、イギリスとはかなり差があるような気がします。

先程、日本人の比率が低いとおっしゃいましたが、それもその辺にあります。日本の行政やシンクタンクの人も、ザルツブルグであれハイデルベルクであれ、都市計画・環境計画がしっかりしていて、こういうシステムでこうやっているので、このように環境が保全されている、というところを見ると、何となくわかったような気になって帰ります。

しかし湖水地方に行くと、ナショナルトラストがあり、ＢＣＴＶがあり、田園地域委員会があり、強権的に何をやっているわけではなく、ボランタリーな活動があって、きれいになっている。それを見て帰ったのでは、行政として商売にならない、あるいは、成果と

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

見なされない、というところがあるのではないかという印象があります。
　アンブルサイドのホテルに泊まりましたが、あのような古い町ですから格式張るのかと思うとそうでもなく、ちょっと場所を変えると、ロンドンのパブのようなところがあって、大騒ぎをしている。強引なしつらえや強引な造りをしないところもあります。そして、アンブルサイドなどもそうですが、まちの姿が明らかに大陸の教会を中心とした町の造りとは違っています。特にドイツを中心とした大陸との差をすごく感じました。
　それからイギリスというのは不思議で、田園地域対策や森林問題、環境対策などを、政府というより中間的な団体、ナショナルトラストもそうですし、先程のＢＣＴＶというイギリス森林保全ボランティアや田園地域委員会などの行政委員会がやっている。こうした点がとても特徴的です。

（松田）　スポーツ観戦もそうですし、ラスキンやキーツの文化事業もそうですね。

（手塚）　行政のような行政でないようなところが、責任を持ってボランタリーにやっています。この仕組みを、このような厳しい時代になってくると、当然流れとして、我々は学んでいかなければならないと感じました。

（小田）　日本で具体的にナショナルトラスト的なことをしているエリアはあるのですか。

（松田）　日本に、ナショナルトラスト協会はあります。

（犬塚）　北海道の方と和歌山で自然林の保護をやっています。

（手塚）　日本では知床、和歌山の紀伊半島、それから・・・。

（松田）　和歌山の紀伊半島はどこですか。

（手塚）　ちょっと忘れましたが、あります。それから都会では鎌倉でトラスト運動が展開され、古都保存法制定の契機になったようです。さらに、長い間ディベロッパーと大戦争をやっていましたが、結局、最後に鎌倉の山が守られました。あれも、もともとはトラストの思想が入っているのではないでしょうか。

（犬塚）　白神山地もそのようなかたちでしたね。

（手塚）　１０年くらい前は、日本にもかなりトラストがありました。

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

（犬塚）　屋久島だとか、世界遺産的なものもそういう傾向はあるのでしょうか。

（手塚）　白神などは、世界遺産に指定されたことにより入山が禁止されたと聞きます。もちろん、この入山禁止には様々な議論がありますが。また、阿蘇でも、ナショナルトラスト運動がかなり盛んになっています。

ｂ．ザルツカンマーグート（オーストリア）

（松田）　ザルツブルクは１人しか詳しく調べていないので、２０分くらい話をしてください。

（中田）　ザルツブルクには、３回ほど参りました。ザルツブルクはウィーンと並んで、オーストリアの最大の観光都市です。この町は、ザルツブルク州の州都で人口２０万程だそうですが、１キロ四方の旧市街地には、城塞、教会、修道院、宮殿などの歴史的建築物が集積し、旧市街地全体が見所であり、かつ川と山が織りなす風景があることが特徴的だと思います。また、ザルツブルク東部には、ザルツカマングートという山と湖沼の美しい自然地域があります。

この湖沼地域の中心がバート・イシュルという温泉地で、時のオーストリア皇帝フランツ・ヨーゼフも保養にやって来ています。この温泉は死海よりも濃い食塩泉で有名です。また、ザルツブルクから南の山岳地域に行きますと、バート・ガシュタインなどのスキーと温泉で有名な保養地があります。バート・ガシュタインは鉱山用のトンネルが蒸し暑く、これを利用して温泉治療が行われています。ザルツブルク自体が有数の歴史的観光都市ですが、周辺地域の魅力も大きいといったことで数多くの観光客を集めていると思います。

ザルツブルクはもともと岩塩の交易の基地として、経済的には栄えました。また、中世には教会がこの町を支配し、数多くの教会が建設され、中世後期には贅沢な宮殿や離宮なども大司教の手によって築かれ、今日の歴史的な町並みができたわけです。モーツアルトなどの音楽家も教会に仕え、贅沢な生活に彩りをそえるといったサービスを提供していたようです。１９世紀初頭には、この町はオーストリアに併合され、オーストリア帝国の州都になってしまうという経過をたどります。

ザルツブルク・フェスティバルのアイディアは、ザルツブルク生まれのモーツアルトを顕彰しようとしたことから始まります。そのモデルはバイロイトとワーグナーの関係のように、ザルツブルクとモーツアルトの関係を強化しようとすることであったそうです。もっとも、モーツアルトがこの町で生活していた当時は、あまり優遇されてはいませんでしたが・・。

まず、１８４２年にはモーツアルト像を建立する。１８７０年には、モーツアルトの音楽の関心を高めるため、地元名士たちは国際モーツアルト基金を創設し、この基金の支援でモーツアルトの作品の演奏会を開催します。その後、芸術の殿堂として音楽ホールを建

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

設することを目的に、１９１７年にザルツブルク・フェスティバル劇場協会が設立され、１９２０年に第１回目のザルツブルク・フェスティバルが、ドーム広場で開催されます。この時期は、第１次世界大戦後の混乱期にあたり、精神的な基盤として祝祭の重要性が着目され、オペラや音楽以外に宗教劇や演劇をも含めた祝祭を構想するようになりました。フェスティバルはもともと、教会のリーダーシップのもとに人々が集い、言葉、音楽、ドラマをつうじてコミュニティー感覚や準宗教感覚を体験するものです。第１回のフェスティバルのディレクターであるラインハルトは、経済不況時の開催にあたり、町全体が祝祭劇場であり、市民全体が劇場に参加するという目的で、暖房のいらない８月の夕べを選び、ドーム広場を会場とし、また、２９日にはザルツブルク市民に開放された特別公演を催したそうです。当初から、フェスティバル当局は、地域の人々の参加意識の高揚とともに、著名人を引きつけ、世評を得るため、つぎの様な方針で臨んだと言います。

第１は、世界１級の歌手を見いだすこと。第２は、フェスティバルを国際的にするため、より多くの著名な指揮者や芸術家を招聘すること。第３は、オーストリアとともに諸外国の作品を選ぶこと。第４は、新たな音楽については、初演の舞台となるよう努めること。第５は、地元民の参加を推進するため、地元のポピュラーな文化をいれ、フォークダンスの夕べなどを開催すること。

フェスティバルは当初から財政的な問題を抱えていました。１９５０年になってようやく、公共セクターの本格的な財政支援がえられるようになり、運営体制が確立し、継続的な活動が可能になりました。なお、１９２６年には祝祭小劇場、１９６０年には祝祭大劇場が完成します。このようにソフトづくりや推進体制づくりが先行し、施設などのハードづくりは十分時間をかけて整備しています。こうした長期的な取り組みによって、ザルツブルク・フェスティバルが国際的に有名になった訳です。現在、フェスティバルは７月末から８月末の期間、演劇、オペラ、バレエ、様々なコンサートを含む数多くのプログラムがおこなわれています。会場は大劇場、小劇場の他、ドーム広場、聖ペーター寺院など都市の屋内屋外の施設やオープンスペースが利用され、町全体が会場のような雰囲気になっています。

ザルツブルクの観光については、モーツァルトが生まれたというより、もっと大きな意味は、おそらく「サウンドオブミュージック」の映画ではないかと思います。この映画が作られて以降、高級文化がわからない一般の若者やファンがやって来て、映画の舞台となった場所を追体験しています。こうした映画のシーンとなった場所を見て歩くツアーもあります。

１５年前から徐々に、町が商業的になるのとともに、きれいになっていくという状況です。以前はかなり、自動車がザルツブルクの町を飛ばしていましたが、少しずつ規制が始まり、良いか悪いかとは別として、観光地として洗練化してきています。

町をきれいにするというのはドイツ、オーストリア国民にとっては習性になっており、湖水地方にしても、町や公園にしても、かなり手をかけて、きれいにしています。

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

日本でザルツブルクをモデルに出来るかというと、私は湖水地方のような自然地域だけでは成り立ちえないと思います。例えば城下町があり、その周辺に自然地域があり、そこにある種の文化があるというところで、いかに総合的なＶＩを推進していくかというモデルとしては、非常にいいモデルであると思います。しかし、歴史的遺産をきちんと保全しているところは、日本の都市では少ないので、この辺が日本の町にとって大きな課題であろうと思います。

（松田）　小田さんの方から速記が上がったら、次の条件をつけてもう一度、書き換えていただきたいと思います。余暇開発センター時代の資料を持っているはずなので、そのときの資料で、歴史的な流れをきちんと入れておいていただきたいというのが１つです。

（中田）　フェスティバルについてはあります。

（松田）　２つ目に、モーツァルトという人に、世界が関心を持ち続けてきたことと、これからも持ち続けるというのがあります。これはワーズワースに合わせ、「サウンドオブミュージック」の世界は、「ピーター・ラビット」に合わせたらいいだろうと思います。そして、それを戦略・戦術で展開したというのが、カラヤンという希有な人を指揮者に迎えたということ。

夏はみんな地中海に行きたがるわけで、その夏場の一番のときに、地中海のリゾートともろに競争をして、立派に勝ち残ってきたのがザルツブルクです。夏場の音楽祭の期間中、国際会議がよく開かれます。つまり、国際会議を誘致するために音楽祭があるのです。ところが出張のときは、国際会議でなければ出張に行けないわけです。音楽祭に行きますと言うと、出張にならないわけです。しかし、それを上手につくったのです。国際会議場はたくさんあります。

そして、クラシックのオーソドックスな音楽祭だけではなく、教会などいろいろなところで、若いグループの音楽会もあります。来年から、ここの指揮者に小澤征爾さんがなるわけで、これはすごいことです。ニューイヤーコンサートは日本人のあこがれで、この不景気でも少しガードを緩めると、日本の客がドッと今でも来ます。小澤征爾さんが指揮をすると、日本からその期間中に行きたいという人が、たくさん出てくるのではないかと思います。

戦略・戦術がうまくて、カラヤンに中田英寿と同じようにすごい金額を払っても、町全体があれだけ集客すれば十分、ペイします。これはすごく上手にいったケースだと思います。これをウィーンがやれなかったのは、おもしろいと思います。ウィーンと比較して、ウィーンの方が音楽の都としては、ずっと先をリードしていたわけでしょう。

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

（中田）　ウィーンは、オペラでも何でも、わりと常にやっているわけです。こちらは、それに合わせて期間を限ってやるというところに、価値が出てきたわけです。

（手塚）　国立オペラ劇場が８月閉館にしてしまう理由は、何なのでしょうか。

（中田）　やはりみんな、外にバカンスに出掛けてしまうのでしょう。

（手塚）　やってもしかたがないということですか。

（松田）　夏場の一番閑散としたときに音楽祭をやったところが、ミソなのです。

（手塚）　ウィーンの場合は、そのかわりと言っては何ですが、ウィーン市庁舎前の広場でフィルムコンサートを行うのです。大きなスクリーンに国立オペラ劇場での記録フィルムを映し出し、広場には大勢の人が来ています。毎晩２万人くらい人が来ているので、国立劇場で行うより相当賑やかなのではないでしょうか。

（中田）　夏場はザルツブルクより、ウィーンは暑いのではないでしょうか。

（手塚）　暑いですね。

（松田）　私は１週間、ザルツブルクにいたことがありますが、行った人たちは、その音楽会の思い出があるので、ヨーロッパでもう一度行きたいところに、全員がザルツブルクと言います。

（中田）　ここは、音楽会だけでなくても、１年中行けるのでしょう。

（松田）　冬もそうなのですか。

（中田）　結局、ザルツブルク・フェスティバルは世界から観光客を呼んでいますが、ザルツブルクには修学旅行客も多いのです。それから、ファミリーでちょっと子供を連れて、歴史を見学させるという人たちもたくさん来ます。ですから、いろいろ人を呼び集める資源があるという感じがします。

（犬塚）　建築物が多いですね。ここは塩の温泉はやっていないのですか。

（中田）　昔、ミネルバ宮殿の近くにクアハウスがあり、そこで温泉施設がありましたが、

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

それはやめてしまいました。今はプール施設があり、きちんとした温泉療法は行っていないと思います。ただ、ザルツブルグ周辺地域にはバート・イシュル、バート・ガシュタインなどの有名な温泉地があります。

（犬塚）　私はそちらに興味がありました。

（中田）　ですから、一時間圏内で、そういった湖沼地区や山に行ける。

（手塚）　そこは職人の多いところですね。メインストリートは彫金や飾りの店がたくさんあり、それはオーストリアでは一番発達しているところだと思います。
　それから、よくわかりませんが、オーストリアの王室とスペインの王室は縁戚関係なので、スペインからおいでになっている方々が相当多いですね。スペイン語がすごく多いところで、両国の特質を考えると不思議に感じました。

（松田）　ハンガリーから、ドナウ川に沿っているので、川の旅行もできます。

（犬塚）　私はドイツ側から入りましたが、車で入ると町の外壁の中に駐車場があり、トンネルの中に入って暗くて、中は荒れているし怖い感じですが、外側の城壁の中をくり抜いて駐車場にして、そこから町の中へは歩いて行くという感じで、上手に造ってあると思います。

（松田）　それでは、以上でザルツブルクは終わり、資料をたくさん持っているので、少しきちんと書いていただきたいと思います。これでセッション１を終わります。

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

セッション２　「山梨県におけるビジターズ・インダストリーの展開」

２－１　はじめに

（松田）　それでは手塚さんに、山梨県全体のビジターズ・インダストリーの政策と、個々の具体的事例を交えて３０分話をしていただき、そのあと議論します。

バリ島は詳しく知っている人がいないので、あとで全体で入れたいと思います。私は２回行っていますが、遊びばかりですので。

（手塚）　皆様方には、山梨の仕事については、ほとんどボランティア的にやっていただき感謝申し上げます。

今日は、体系的にまとめるということができないもので、一応本文ということで「山梨県におけるビジターズ・インダストリーの展開」（巻末資料②参照）と、資料を別冊で用意しています。これで 30 分ということで、最後の１０分くらいビデオを見たいと思います。

一番上の「Do your best. And it must be first class.」というのは、清里の開拓の父と言われているポール・ラッシュ博士の言葉です。先程、後藤先生の方から「ケルトの十字架」という話がありましたが、清里では「アンデレクロス」と言い、斜めの十字架を使っています。「最善を尽くせ。そして、一流であれ！」というのは、いつも私たちが思い出す言葉です。

目次を見てください。１「ビジターズ・インダストリーとは何か」と、３「山梨での展開過程」はさらっと触れる程度にして、大事なところとして、６「ビジターズ・インダストリーに関する私見」以降を中心にお話したいと思います。ここの部分は、あくまでも私見ということですので県行政の考え方とは若干異なる部分もあるのかもしれません。

２−２　ビジターズ・インダストリーとは

今、山梨県では産業政策としてビジターズ・インダストリーを推進しています。現在の知事が就任したときに「プレ幸住県計画」というプロローグのような行政計画があり、その後、山梨幸住県計画にバトンタッチされます。これが現在の県の長期計画で、平成６年２月に策定されました。その中でビジターズ・インダストリーの推進を宣言し、今日に至っているわけです。３ページにある「優れた立地条件」云々というのが、山梨県におけるビジターズ・インダストリーの公式定義です。少し長いので、黙読でさっと流していただければありがたいと思います。

計画は、マスタープランと実施計画の、大きく２つに分かれています。マスタープランは、基本構想と基本計画からなっています。基本構想の目標年次は、漠然と２１世紀初頭と言っており、何年とあえて言っていません。これはどうなるかわかりませんが、リニア中央新幹線が事業化されるとか、中部横断自動車道・・・これは、清水から日本海へ抜ける高速道路ですが、これができるのが２１世紀初頭だろうという状況で、２１世紀初頭に

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

大きく山梨が変わります。

その時点で、どのようなことをわきまえなければならないかという、理想像を提案しようというものです。基本構想の中では、従来の計画にありがちな、これをやる、あれをやるということは一切書いていないのが、この計画の利点でもあり、反面、何を意味しているのか、何をやろうとしているのか曖昧なのではないかと、常に批判を浴びている点でもあります。基本構想の中では、２１世紀初頭の山梨県ではビジターズ・インダストリーが、活発に展開している、という夢を描いています。

２−３　山梨県での展開の契機

ビジターズ・インダストリーが必要となった背景として、「幸住県やまなし」の建設というのが幸住県計画の基本理念になっていることがあります。「幸住県やまなし」は、「住みいい環境の中で、健やかに、交流を広げながら自己実現を図り、幸せを実感できる社会」です。この「幸住県やまなし」を建設するにあたり、「目指すべき県土像は環境首都山梨である」と言っています。この「環境首都山梨」とは、「すべてのものを行うときに、環境に立ち返ってものを考えるような県土にしていこう」という考え方です。

次に、人口の減少と企業の海外進出と言う要因がありました。この長期計画策定のスタッフに私も携わっていましたが、長期計画を策定していく過程で人口予測をすると、山梨県では国より少し後の２０１５年くらいから人口減少局面に入りそうだったのですが、計画策定時点（１９９５年）で、すでに日本全体の労働力人口は減少に転じていました。当時、県内企業を調べてみると、多くの企業が東南アジアに海外進出している、あるいは、これから間違いなく進出するであろう企業が多くありました。

そして最後に、当然環境問題があります。山梨県は自然環境に恵まれていますが、この自然は、信州や北海道、岩手などより以上に、非常にデリケートなところがあります。デリケートというのは、ある意味では希少であると言えます。そう考えると、「環境首都山梨」と言っている以上、地域振興策もこれまでのように開発型の発想では成り立たず、交流人口をどのように拡大していくのか、と言う方向にシフトする必要がありました。

これまで述べたような観点から、「ビジターズ・インダストリー」を推進していくことが、山梨県にとって大変に重要なことになって参りました。

ビジターズ・インダストリーの展開に当たっては、「環境に負荷のかからない手法」「デリケートな県土の適切な活用を図る」「地域特性を最大限に生かす」ということが重要です。山梨には、豊かな自然や、非常に個性的な地場産業が多く存在しています。それから東京圏との近接性、交通アクセスの改善など立地条件の良さがあります。こうしたことを背景に「交流人口の拡大を考える」必要があります。山梨県の定住人口は現在８９万人くらいです。一般論としては、人口が増えた方がいいと考えますが、当面の社会情勢を考えると、それは仲々難しいことです。そこで、幸住県計画の中では、「交流人口１００万人時代」と言っており、交流人口も含めて県の人口を考えるべきだという意味で、交流人口を含めて

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

山梨県の人口を１００万人と考えています。

２−４　山梨県での展開過程

平成６年２月に長期計画が策定され、それ以降、実際にどのように動いているか説明致します。

第１期としては計画策定の前、平成３年１０月に「(財) 広域関東圏産業活性化センター」から、「山梨県地域アクティブクロス構想」が県に対し提案されました。東京大学の月尾先生が座長をつとめられ、「コンベンション、メッセ、テーマパーク、リゾート等、人を呼ぶ機能・情報があり、それを求めて人々が訪れ、これらをサポートする宿泊施設等の諸機能の集合体」のようなものが「ビジターズ・インダストリー」であり、山梨にはこのような産業展開がふさわしいのではないか、という内容でした。

ほぼ同じ時期に総合研究開発機構（ＮＩＲＡ）が発表した「文化首都の研究」の中で、当時アメリカで起こっていた現象・・・つまり従来の観光業とはずいぶん趣を異にして「人対人による情報の交換を目的に都市に集まる人々の活動が産業を生む」という意味で「ビジターズ・インダストリー」がアメリカでは盛んになっている・・・という報告がありました。

こうした議論を踏まえたうえで、平成４年１月の職員に対する知事の年頭訓示で、「ビジターズ・インダストリーというものが環境首都を目指す山梨にふさわしいと考える。」との考え方が表明され、これを受けて長期計画が策定されたという経緯があります。

第２期は松田先生、中田先生に入っていただき、企画県民局地域政策課において「地域活性化方策研究会」が組織され調査・研究が行われた時期です。当時は「ビジターズ・インダストリー」という言葉を明快に伝えることが大変に難しい段階でした。というのは、先程申し上げましたように、幸住県計画が、理想像を提案する形の計画であり、施策や事業の展開まで詳細に示していなかったことに原因があるように思います。そこで、この研究会で議論したのは、ビジターズ・インダストリーを実際にどう動かしていくかということでした。単に産業という視点からだけではなく、これからの地域の命運を握る地域政策であるという意味で議論をしていただきました。当時の議論はもっと奥が深く、これだけでも大変時間がかかるので、このくらいにさせていただきます。

その後、平成１０年度に、幸住県計画の第２次実施計画が１年繰り上げてスタートし、これを機にビジターズ・インダストリーは、商工業・サービス業の振興の施策と位置づけられました。それに伴い、従来は企画部で所管していたものが、商工労働観光部へ移りました。当然、全庁的に行っていかなければならないことは変わりませんが、この段階では、ビジターズ・インダストリーをホスピタリティーに重点を置いた産業政策として、位置づけ、施策展開することに変化していきました。芸術・文化という色合いよりも、産業としてどうとらえるか、それもホスピタリティー産業としてどうとらえるか、というところに

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

重点を移していきました。

２−５　現在の施策大系

現在の施策大系は、大きく３つの柱になります。１）交流拠点の整備と情報発信機能の強化、２）推進体制の整備、３）交流の舞台づくり、ということです。添付致しました資料の中には、実際には実現されていない部分も多く、このとおりにいっているわけではありませんが、大枠としてはこのような形となっています。

特に重要なのは、推進体制をどう整備するかということです。一体ビジターズ・インダストリーを推進する母体は何なのか、どこがやるのか。当然、流れとしては、民間主体に進めていくことになるでしょうから、民間と行政とが一体となってビジタービジターズ・インダストリーをどのように動かしていくのか、という議論が現在も行われていますが、仲々回答は見いだせません。

２つ目が「交流の舞台づくり」です。昨年、松田先生や犬塚さんにお手伝いいただき「交流シーズ発掘調査」を行ったり、補助事業としてビジターズ・インダストリーの立ち上げ的な事業を支援したり、さらには人材育成をしようということも、来年度から行うよう検討しています。これが全体の概括です。

２−６　現在の進め方

まず情報の発信についてですが、現在、山梨県のホームページには、ビジターズ・インダストリーのコーナーが設けられています。ここでは、「ビジターズ・インダストリー」の内容やその目指すところをわかりやすく解説したり、県下に展開する様々な交流事業を豊富に紹介しています。情報の提供、各拠点とのリンクページなど、比較的、短いサイクルで変えていますので、是非ご覧ください。

また、「山梨ビジターズ・ネット」を平成１２年１２月から試験的にスタートしました。これはインターネットを使ったメールマガジンの配信を行うことと、会員の皆様方と山梨との情報交換の場として整備しております。

お手元にある「山梨ビジターズ・ネット」というパンフレットが、県内の７つの拠点と東京駅八重洲口の山梨県東京物産観光センターに置いてあります。お名前等必要事項をご記入いただき、「自然」から「その他」までのカテゴリーにチェックしてファックスなり郵送で送っていただくと、それに関連する情報が月に２回、インターネット環境のある方には、メールマガジンとしてお届け致します。当然、ウェブ上からも申し込みができます。これに登録された方は、自動的にビジターズ・ネット会員になっていただくこととなります。ぜひ皆さん、お帰りになってからお申し込みいただきたいと思います。

インターネット環境をお持ちでない方には、「山梨ビジターズ」というダイレクトメールが四季に１度届けられることになっています。いずれはダイレクトメールが減少し、多くの部分がインターネット環境に移行して行くのではないかと考えています。

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

１月３１日現在の会員は、総数で７,０８３名です。　そのうちインターネット会員は、２,２８８名です。全体の３２.３％がインターネット会員で、残りがダイレクトメール会員となっています。男性の方が圧倒的に多く、希望するカテゴリーは温泉が一番多くなっています。年齢別の登録者は資料のとおりです。以上が１つ目の情報発信の展開事例です。

２つ目は、研修会・シンポジウム等です。昨年３月、小布施堂の市村社長様においでいただき、甲府市において「小布施の挑戦」というテーマでシンポジウムを行いました。市村様は大変に示唆に富んだお話しをされました。そもそも小布施というのは観光地づくりを目指しておらず、基本的には農業都市である。このため農業をどうするかを第一義的に考えており、その結果として観光地になっている、つまり「結果観光」だとおっしゃっておりました。小布施では、人を呼ぶことを第一義的に重要と考えるのではないということです。

それからビジターズ・インダストリーを考えるときは、「広域地元」を考える必要があるともおっしゃいました。外から人を呼ぶことにいたずらに熱心になるのではなく、周辺地域を巻き込み広域的な地元を形成することが重要だとおっしゃられました。遠きものとの交流の前に、近きものとの交流も大切だ、と感じています。

今年の３月２１日には、ライバルである三重県から「モクモク手づくりファーム」の吉田専務においでいただき、実際に交流産業をどのように起業してきたのか、実践例を通じた研修会を開催する予定でおります。

その他ということで、「山梨の魅力メッセンジャー制度の創設」を検討中です。山梨学院大学に中心になっていただき、資料に掲載されているような講座を開設し、学生に受講していただきます。最後にレポートを提出していただくと、内容を審査の結果、一定要件を満たした方をメッセンジャーと認定し、「大学からどこかへ行っても山梨のことを忘れないで」という願いを込めた事業が、来年から始まる予定です。

さて、もちろん情報発信も大変に重要なのですが、最も重要なことは、人々が山梨を訪れたくなるような魅力をどのようにつくっていくか、と言うことだと思います。そこで、次に「交流の舞台づくり」について説明致します。

１つは、「交流シーズ発掘調査」ということで、山梨総合研究所へ委託事業として実施しているものです。山梨県には未発見の資源や、再評価しなければならない地域資源がたくさんあります。これを発掘あるいは再評価するとともに、事業化に向け実践的な提言を行うということを目標にした調査です。単に調査して終わりではなく、今年度から、調査の内容を実現しようとする団体等については、立ち上げの段階で、県も優先的な支援を行うという制度につくり変えています。１１年度から始まった事業なので、１１年度については山中湖村と協同組合ファッションシティ甲府、「アリア・ディ・フィレンツェ」と言っていますが、この２カ所について、調査・提案致しました。

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

山中湖文学の森については、ハイライフ研究所の方から、大枠として貴重な中長期的提言をいただくとともに、それらに加えて、松田先生を座長とするプロジェクトティームから、早急に実施に移すべきご提案もいただきました。

協同組合ファッションシティ甲府は、甲府市内にある「アリア・ディ・フィレンツェ」というファッション産業を中心とした異業種工業団地です。「印傳」といいまして鹿革でお財布やバックなどを作っている会社や、ジュエリー、ニット、テキスタイル、変わったところでは公認会計事務所など、１２社くらいで構成される異業種団地です。昨年、建築大賞を取った建築家の北河原温先生が、イタリアをモデルに約７ヘクタールの団地をすべて統一コンセプトで設計し建築した団地です。そういった意味で、「アリア・ディ・フィレンツェ」（フィレンツェからの香り）という名前をつけています。元々ファッション産業が集まっているので、ビジターズ・インダストリーの重要な拠点となりえるということで調査・提案を行いました。

山中湖では、とりあえず三島に関するワークショップや湖水地方に学ぶ研究会が立ち上がろうとしています。ファッションシティ甲府の方では、これからのものづくりと、ファクトリーパーク的な事業をどう組み合わせていくかについて検討しているところです。

１２年度の事業については、上野原ハーブガーデンを対象として実施しています。東京、神奈川、山梨の境で、１８年前に都会から引っ越してきた女性が、農業を起業したという事例です。おもしろいのは、従来の農業は市場に出荷するか、あるいは産地直送出荷ということを行っていましたが、ここでは外食産業、それも一応名の通ったシェフに対してこだわり野菜を売っていくこと、所謂Ｂ２ＢというかＢ２Ｃというか、とにかく新しい農業が起こりつつあります。本当に驚くようなシェフが、ここの野菜でなければ駄目だということで、買い付けにやって来ます。そういうシェフはめったに自ら買い付けに出かけないらしいですが、上野原までわざわざおいでになるようです。この事例につきまして、現在、調査・研究を進めています。

さらに、先程申し上げましたように、ビジターズ・インダストリーを推進するための実践活動に財政的な支援を行っています。これは、ビジターズ・インダストリー推進事業で、補助事業として行っております。特に先程の交流シーズ発掘調査の結果を受けて、その提案を実践しようとする団体には優先的に支援しているところです。２分の１補助で、補助上限が１００万円です。予算総額として３００万ですので、大きな事業ではありませんが、県内各地のビジターズ・インダストリーを推進する取り組みに対しきめ細かに支援しています。

２−７　今後の展開に関する私見

中国では、サイトシーイングの「観光」と区別して、ツーリズムを「旅游」と訳しています。最近、中国では「無農不穏　無工不富　無游不旺」と言っているようです。意味は「農業がなければ穏やかな暮らしはありえない。工業がなければ富が得られない。ツーリ

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

ズムがなければ、生き生きと命を輝かすことができない」ということのようです。

皆さんには釈迦に説法以外の何ものでもありませんが、観光というのは国の光を観るという意味で、さらに、「観」の語源をよく調べてみると、「仰ぎ見る」と「示す」という２つの意味があります。こうした点から考えると、「観光」を厳密に定義すれば、「他国の輝かしい文物、風光、制度を視察すること」であるとともに、「自国の輝かしい文物、風光、制度を示す。」という２つの意味から成り立っているのではないかと考えます。

先程、犬塚さんのご指摘にもありましたが、日本の翻訳言語は外来語を無批判に受け入れてきました。漫遊的な意味合いの強い「サイトシーイング」を「観光」と訳してしまい、それが定義となって今日まで使われている、という感じがします。そこで、言葉の本来の意味を考えると、中国で「旅游」と定義するもの、あるいは、本来の意味での「観光」こそが、現在、山梨県が推進している「ビジターズ・インダストリー」なのではないかと考えています。そうすると、単なる「観光業」を超えた、技能としての観光という見方ができるような感じがします。

さて、当初から非常に疑問になっていたのですが、今日、英語の「industry」を単純に「産業」と訳していますが、本来日本語の中では、生業・営み・技・技能など多様な言い方があったはずで、ビジターズ・インダストリーの「インダストリー」を、「産業」と訳してしまうのは少し単純すぎるのではないかと感じています。「観光」という言葉を本来の言葉に戻し、「industry」の本来の意味を考える時「観光という生業や技能をどう育てていくか」ということをこれから考えていくべきなのではないかと思っています。

その場合、どのような視点から考えるかと申しますと、第一には、これまで議論になっている、自然をもう一度どう捉え直すかということです。第二には、商品の論理だけで規定されない、半商品という視点が重要だと思います。この視点は、松山商科大学で先生を辞められた渡植彦太郎という方が主張されたもので、「明治の人間は、半商品ということを知っているので非常に強い。」ということをおっしゃっています。

この「半商品」については、哲学者の内山節さんが次のように解説されておられます。「明治の東京はいうまでもなく商品経済の社会である。しかし明治の商品経済と今日の商品経済とでは何かが違っていた。例えば、町の職人たちは、商品をつくり、その商品を売って暮らしていた。しかし職人たちは、商品を作るためだけに働いていたわけではなかった。職人の誇りにかけてよりすぐれたものを創造しようとしていたのである。ここには、自分自身の誇りを守るために働く職人の姿があった。……そして、その頃は、そんな職人の腕を見極めることのできる庶民がいくらでもいた。単に効用を果たすだけの物では、つくり手も消費者も満足しない関係がここに生まれていた。このような関係の中で取引される商品を、渡植は「半商品」……と呼んだのである。」

別な表現をすると、「商品経済のある部分に、生産者も消費者も市場や商品の論理あるいは合理性だけで動いていない関係が成り立っており、ここに半商品の世界、あるいは市場経済の合理性のみで律し切れない非市場性が存在している。」ということで、私も納得でき

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

るのですが、「半商品」ということになると、中途半端な商品というイメージで受け取られることが危惧されます。それで資料１３ページの表に、今私の考えていることをまとめてみました。

例えば、山梨県の代表的地場産業であるワイン醸造業には、つくり手と受け手とが醸し出す関係性の中でワインづくりを行う醸造家が多数存在しています。彼らは、天に祈りながら良質のブドウをつくり、このブドウから様々な醸造法を工夫しながら一級のワインを作り上げます。そして、このワインを評価し、しっかりと受け止めるのは、彼らが関係性を築き上げてきた気骨のある消費者です。

彼らは、自らのブドウ畑を消費者に見せ、あるいは、共同作業を行い、収穫を祝い醸し出されたワインという作品を味わいます。こうした営為の中から、しっかりとした関係性が築き上げられ、この中で、作り手の意志と受け手の思いが一致したときに、初めて貨幣価格を超えた価値が生じます。もちろん、市場経済の中では、不特定多数の取引の中でワイン 1 本の貨幣価格は決められていきますが、大切なのは、市場経済を突き抜けた何かなのだと思います。

こうした関係性の中で作られる半商品世界では、つくり手側は技能者であり、職人であり、文化人である。そして、需要する側は、協働者、同志、Partner と言うことができます。また、こうした世界には、単なる生産現場を超えて、ものづくりの文化が形成され、さらに、こうした文化や技能の中では時は断絶せず、より良いものづくりを目指し、技能や文化が代々受け継がれていきます。例えば、昨年のブドウづくりの反省点や有効な技能は必ず次の年に活かされます。つまり、ものづくりの中に時が積み重なっていきます。

これに対して、一般的に市場の中で流通する商品はどうでしょうか。貨幣を仲介に不特定多数の人に不特定多数が商うことにより、市場価格が形成されます。供給するものは単純な商品であり、供給者は技術者であり、事業者であり商人です。そして、需要側は、単純に、消費者、購買者、Consumer であり、その時々の空腹を満たせば良い、あるいは、一時の心の渇きを潤せばよいとすれば、これは「消費の文化」と呼ぶのが相応しい。こうした消費の文化の中では、時は積み重ならず流されていく。例えば、真空管技術の開発に費やした時間は、ＩＣの登場に伴い、その殆どが流されてしまいます。

ビジターズ・インダストリーを推進する場合、こうした、地場産業への支援がこれからますます重要になっていくように感じています。

第３に、芸術文化の生業性ということです。山梨に住み、バイオリンとチェロを作っておられる飯田裕さんに、「文化の産業性、芸術の産業性についてどう考えますか」という質問を致しましたところ、次のようなお話しを伺いました。「小室哲哉のようなコマーシャルミュージックを作る人は、どうしても受ける音楽を作らなければならない。だから、そのようなものを作る。つまり、前提として音楽産業があり、それに合わせるように音楽を作る。そして運がよければ売れる。しかし、モーツァルトやバッハ、ベートーベンは、受け

©財団法人ハイライフ研究所 http://www.hilife.or.jp

を狙って創作活動をしていない。つまり、創作活動こそが、彼らの人生である。彼らは内面から絞り出すように作品を創る。彼らは幾つもの秀作を創ったが、それ故、絞り出された作品は、本当は１つだったかもしれない。結果としてこれを商業的に利用するのは商人の勝手であるが、彼らの創った作品に何ら影響を与えるものではない。」

このことは、中心価値というところにかかわってくると思いますが、こうした絞り出すような感覚が、これから必要になってくると思います。それが、ビジターズ・インダストリーの本来の意味を考えるとき、非常に重要なのだと感じています。

２−８　原点としての観光技能の取り組み

「原点としての観光技能の取組」ということで、山梨県の取り組みを簡単に説明して、最後にビデオを見ていただいて終わりにしたいと思います。

飯田さんは、１９９５年から山梨県の笛吹川沿いで「笛吹川国際音楽祭」というのを始められました。コンセプトは明快で、飯田さんの作った楽器で演奏している人だけが来て演奏する。それも室内楽をするというものです。

どうして飯田さんがこのようなことを始めたかというと、まず第１に、地域に良い音楽をということです。年に２〜３回来る著名なプロの音楽家というのは、短い期間に多くの場所で演奏するため、本来の音楽を演奏することはまず不可能です。こうした演奏家ではなく、この音楽祭のためだけに演奏に来る人が、心を込めて演ずる音楽祭を開催したかった。こうした音楽こそが地域にとって良い音楽だ、ということです。

次に、室内楽の理想を追求したかった。彼の作った楽器がここで集合し、彼の作った楽器だけで音楽が演じられるということで、とてもリハーサルがスムーズで、音が溶け合うのだそうです。

飯田さんは、１９８７年に牧丘へおいでになり、町の依頼があったので無料で子供たちのためにチェロとバイオリンとピアノの教室を開いておられたそうです。この過程でプロの演奏家が、だんだんここに集まってくるようになりました。そして、この教室の卒業生が１９９５年にイタリアのラバローネへ行き、合同演奏会を開催するまでに成長しました。

この町は人口６,０００人くらいの農山村で、「巨峰」が基幹作物という農業の町です。交差点に立っていると、バイオリンやチェロの音楽が聞こえてなかなかいい風景がありましたが、町長が変わってからは、こうした支援制度がなくなったようです。

素晴らしいと思うのは、この子たちは飯田さんの楽器を演奏する人たちと一緒に共同演奏し、質の高い感性を養っていたので、海外からきた著名な楽団の演奏を見に行ったとき、飯田さんに「この人たちは本当にバイオリンを演奏しているのか。とてもそうは思えない。」と言ったそうです。そのくらいのことがわかるような実力を身につけていたことは驚きです。

その他、資料に掲げた取り組みについて簡単に説明申し上げます。先ほど紹介申し上げましたように「山中湖文学の森」や「アリア・ディ・フィレンツェ」は、中心価値をこれ

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

からどう見せていくか、大きな課題です。また、「Ｒクラブ」というのは、勝沼のある醸造家が始めた試みです。消費者に産地へ来ていただき、枝の剪定から畑の管理、さらには収穫、仕込みまで体験することにより、本物のワインを楽しんでもらう、という試みです。これも、毎年盛況になっています。

それから、先ほど後藤先生からお話のあった高原地域に関連する話で、昨年 10 月に「プレ・１,０００m・サミット」が開催されました。　藤井経三郎先生などに来ていただき、１,０００mエレベーションの高原地域の効用をどのように生かしていくかという学術的な会議を開催しましたが、来年からはもっと大きな学術会議として山梨に定着させていきたいと考えています。

「都留市桃林軒」は、松尾芭蕉に関するものです。芭蕉は、生涯を江戸か旅の中で暮らしましたが、江戸の大火を逃れて５か月間山梨の谷村に滞在していることが明らかになりました。年代的に考えると、実は芭蕉の「わび・さび」の世界は山梨から出たのではないかという可能性もあり、今後研究していこうと思っています。「上野原ハーブガーデン」は先ほど申し上げたような話です。

「中富和紙組合」については、現在、中富町に１６件紙すき工場がありますが、そのうち１４件が手すき和紙の工場で、ここでも新たなものづくりへの挑戦が始まっています。また、「西桂糸の音会」は、優れた風合いの糸づくりから始め、年代物の織機で絹織物を中心にものづくりを行っているところで、非常に良質なものを作ります。先ほど述べた関係性の地場産業として、支援していきたいと考えています。また、塩山市では、発酵文化（みそ・しょうゆ、清酒、ワインなど）を大切に育てていこう、という試みを始めています。

「清里１００年計画」は、これからビデオでごらん頂くバレエとも関連しますが、清里を今後１００年かけて作り替えようという動きで、来年４月から計画策定に取りかかる予定です。

資料の最後にゼロエミッションの試みについてお話し致します。甲府市の南側の国母工業団地でゼロエミッションの取り組みを始めたことにより、毎日午前二０人、午後２０人計４０人くらい、視察の方がお見えになります。また、これに併せて、山梨の一宮にある産業廃棄物の分解工場をセットで見に来られます。国の光、ということを考えると、こうした流れが本質的にビジターズ・インダストリーなのであろうと思います。

長くなりましたが、「清里フィールドバレエ」をこれからビデオで見ていただきます。この事業の特徴は、清里オリジナルのバレエを作ったこと、日本で唯一の野外バレエであること、地域文化に刺激的な一石を投じたこと、日本の伝統芸能との共演をしたことなどです。今年で１１回目になりますが全く民間の取り組みなので、清里全体でペイしているかどうかは別問題として、この事業単体としては相当の赤字を出しているのではないかと思います。事業の芸術性や公共性を考えると、今後は、行政としても支援していく必要があるのではないかと思います。

なお、清里のフィールドバレエは、昨年ボリショイ劇場に出演し、「天上の詩」という創

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

作バレエが演じられたようです。

（以下ビデオ上映）
（男性）　昨日もスタッフの人たちと話をして、「これは奇跡だね」という話をしました。だれが欠けてもこのイベントはできなかったでしょうし、それぞれの人たちが心を１つにして、気がついたら１０年間突っ走っていた。それがこのような良い結果になったと皆で思いました。

（ビデオナレーション）　毎年７月から８月にかけての２週間、ここ清里・萌木の村でフィールドバレエの公演が行われています。
　日本を代表するプリマの川口ゆり子、プリンシパルの今村博明、バレエシャンブルウエストが演ずるフィールドバレエ、始まって１０年という月日がたちました。１年目は２日公演だったのが、回を重ねるごとに期間が長くなり、今では２週間にわたるプログラムで行っています。
　フィールドバレエの特徴は、何といっても屋外であるということ。周りの木々はライトアップされ、月の光や夜霧までが見事な舞台装置の１つとなっています。バレリーナたちはまるで森の妖精さながらです。屋外でバレエ公演が毎年行われているのは、日本国内で唯一、清里フィールドバレエだけなのです。上演開始は夜８時、地元の方は仕事が終わってから家族連れで、遠方よりお泊まりで清里にお越しの方も、ホテルやペンションの食事のあとにゆっくりとご覧いただけます。
　公演の２週間前より舞台づくりが始まります。萌木の村のスタッフや有志の方も協力し、組み上げていきます。音響・照明は、東京でも一流の舞台に携わるスタッフ、この１０年に培った屋外舞台でのノウハウを生かし、万全の状態で公演を待ちます。毎日、夕方ごろには本番さながらの舞台練習が行われています。
　いよいよ本番。ここでは第１０回公演の３つのプログラムをご覧ください。新プログラムバレエコンサートの中では世界的な評価を集める和太鼓の天野宣と阿羅漢（あらかん）の演奏で、創作された新作バレエ、「オン・ザ・ロード」が上演され、好評を博しました。花火とともにフィナーレを迎えます。
　９回目にあたる平成１０年の公演では、清里ならではの演目が上演されました。これは、まさに『和と洋の出会い』ともいうべきもので、演題は「時雨西行」、バレエと歌舞伎の見事なまでの調和です。好評により１０回目も再演が行われました。
　創作バレエ『天上の詩』、ここ清里が舞台の物語であり、「萌木の村」の屋外のステージで踊ることを前提に、新しく作られたものです。平成９年度文部省芸術祭大賞を受賞しました。
（ビデオ終了）

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

（手塚）　山梨県内で、今、このような地域資源が育ってきています。演目は第１１回までの軌跡のコピーをご覧ください。今年も７月の終わりから８月に開かれると思います。運営は相当厳しいようですので、皆様、ぜひお出でいただき清里の活性化にご協力いただければありがたいと思います。

（小田）　チケットはいくらで売っているのですか。

（手塚）　一般席が３,５００円で、指定が１０,０００円です。

（小田）　このバレエ公演は、今はだれが主催なさっているのですか。

（手塚）　株式会社萌木の村です。中心となっているのは、代表取締役の船木上次さんです。それで野外バレエの話のついでに、これも松田先生にお世話になったのですが、実践女子大の平原先生のおっしゃったことに関する資料をお手元にお配り致しました。これからビジターズ・インダストリー山梨を進めていくのに、やはり大円形劇場都市というコンセプトが必要だろうというご提言です。

長くなって申し訳ありませんが、今、大体このような感じで進んでいて、観光の定義を見直さなければならず、そういう意味で新しくコンテンツをつくっていこうという動きがぽつぽつ出始めているという状況です。

（松田）　行政の経験もあり、また顧問もされているので、少し長めのコメントを後藤先生、お願いします。

２−９　コメント ― マーケットの観点から

（後藤）　バレエは行っていないと思いますが、音楽祭などいろいろなものがあり、家族も夏の夜は楽しみにしていますし、盛んになってくるといいと思います。

私自身、きちんと論点の組み立てや回答の導き方は自信がありませんが、お話を聞くと、やはり私はどうしても商系の人間で商人派なのです。特に農業の人は、昔から農業協同組合のことを系統でやろうと言うのです。系統というのは、まさに農業共同組合の系統なのです。それに対して、ほかの方は「商系」と言うわけです。例えば田んぼや畑の作物のための肥料を仕入れるときも、系統から入れるか商系から入れるかという判断をするわけです。それから販売するときも、お米の販売は商系に行くか、系統でやるか。系統というのは大体、自己完結するのです。いわゆる農民組織で完結する仕組みで、商人を信用していないのです。だまさなければ商業が成り立たないという発想で、役所も少しそういうところがあります。

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

清里フィールドバレエ・コンサート公演の歩み

日　程	演　目	入場者数
第１回　１９９０年8月１６日・１７日	「バレエ　コンサート」 「ジゼル」　第２幕	３５０名
第２回　１９９１年8月５日・６日	「白鳥の湖」	５００名
第３回　１９９２年7月２７日・２８日	「ジゼル」　全幕	７１０名
第４回　１９９３年8月５日・６日	「バレエ　コンサート」 「くるみ割り人形」	９３８名
第５回　１９９４年7月２７日～8月５日 （１０日間連続公演達成）	A「バレエ　コンサート」 「コッペリア」　第３幕 B「バレエ　コンサート」 「眠れる森の美女」第３幕	３３２６名
第６回　１９９５年7月２６日～8月６日 （１２日間公演） 世界初演大型自動演奏オルガンの 演奏によるコッペリア・全幕	A「コッペリア」　全幕 B「レ・シルフィード」 「バレエ　コンサート」 「コッペリア」　第３幕	４８１２名
第７回　１９９６年7月２６日～8月７日 （１２日間公演）	A「ジゼル」　全幕 B「コッペリア」　全幕 C「くるみ割り人形」第２幕 「バレエ　コンサート」	４９２３名
第８回　１９９７年7月２６日～8月７日 （１２日間公演）	A「シンデレラ」　全幕 B「ライモンダ」　第３幕 「バレエ　コンサート」 C「くるみ割り人形」第２幕 「バレエ　コンサート」	４８１３名
第９回　１９９８年7月２５日～8月７日 （１３日間公演）	A「天上の詩」　全幕 B「コッペリア」　全幕 C「ライモンダ」　第３幕 「バレエ　コンサート」 S「和と洋の出会い」 「バレエ　コンサート」	７４７２名
第１０回 １９９９年7月２４日～8月８日 （１４日間公演）	A「ジゼル」　全幕 B「シンデレラ」　全幕 C「バレエ　コンサート」	８０５１名
第１１回 ２０００年7月２６日～8月８日 （１３日間公演）	A「コッペリア」　第３幕 「四季」 B「天上の詩」　全幕 C「白鳥の湖」　全幕	６３２６名

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

（手塚）　ありますね。

（後藤）　武士というのは、もともと農民の自警暴力組織のようなところがあるので、武士の流れというのは、系統でしかたがないと思います。例えば江戸時代、武士が行政官になっていたこともあるので、江戸のいろいろな改革も、ほとんどは商業を敵視するのです。倹約を進め、商業を縮小していくのです。ですから農民、行政の人、それから軍人は、商業を低く見ます。士農工商ではありませんが、低く見て、かつあまり信じません。今でもこれはあって、アメリカ流のマーケット至上主義は安泰かと疑問を持つ人は多いです。これはどうかなという気がしており、今日のお話でも非常に興味のある論点です。

ある物なりサービスを作った人の思いと、それを受け取って享受する人の思いは予定調和的に一致しないわけですから、ある人たちがこのような思いで、これだけの自己犠牲を払い、金銭的な費用をかけ、これこれのことを我慢をして、これこれの価値のあるものをつくったというだけでは、それはその人止まりで終わるのです。だれかがそれを受け止めて、そういう物なりサービスができ、それを私が引き受けましょうと。何らかの対価を払い、受け取る方も犠牲を払って、費用を払って、それを享受したいという人が出会う。出会ったときに、それぞれの思いの一致するところ、調整がとれたところで取引が成立するという関係です。

この関係をつくる場として、うんと遠くの顔も見たことのない人との間でも、こういうことが成り立つためには、取引のメディアと場所が必要であり、そのメディアが貨幣であり、場所のマーケットであるわけです。これを無視して、いかに現象的なかたちのものであれ、メディアと場のない取引は成立しません。そのときに、その場を商業に求めずに系統や系列に求める、あるいは国家間の権力関係の中で育てる、強制的な事務的な関係で決めるというのは賛成できません。

ですから私は、やはり芸術活動は当然あっていいし、全部が全部マーケットと貨幣で律せられる必要はないと思いますが、かなりの部分はマーケットに乗せて、貨幣で価格をお互いに示し合い、価格を収斂させていき、一致できる価格で需給されるということがいいと思います。ですから、私は文化にも経済を、文化にもマーケットをという立場です。文化のすべてをそうやれとは言いません。逆に言うと、マーケットもある文化の中で成立するので、何から何までマーケットに乗せることは当然、不可能です。文化によって、これだけは絶対にマーケットとお金でやり取りしてはいけない、というものも決めるわけです。

例えば人命はどうか、人間の身体はどうか。昔は奴隷売買があり、マーケットで奴隷市場が成り立っていたわけですが、文化の変遷とともに、今や現代社会では禁止されています。それから、春は売っても買ってもいけません。買春、売春はだめです。そういうことで、すべてのものがマーケットにはなりませんが、かなりの部分はマーケットでやるのが非常に公平なのです。

商業活動というのは本来、悪徳でもずるいものでもなく、その中で物が蓄積されること

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

もあります。資本というのは蓄積形態であり、貨幣の流通の中で、あるところへ資産がたまって資本になるわけです。資本のかたちをとるから、貨幣が蓄積されるわけですが、それは貨幣が蓄積されるだけとは限らず、ある実質を伴ったものが当然、蓄積されることがありうるわけです。文化もそういうかたちで蓄積されています。

人間の活動は、かなり昔から交易・取引を前提にしており、その円滑化のために整備されたマーケットと、そのメディアとしての貨幣、信用力を持つ貨幣が発達してきたと考えるべきです。それを「インダストリー」というのは、ちょっと私は考えられません。現代では、当然インダストリーは工業に限りません。情報価値の創造などを含めて、インダストリーは「生業」と違い、「産業」です。産業とは何かというと、やはり地球規模で流出する貨幣を席巻している。もちろん、ローカル貨幣もあるわけですから、いくらドルが強くても、ドルで世界中が回っているわけではない。当然、お金自身が交換され、価値づけされ、１ドルいくらで交換されて動くわけです。いずれにしても、人間どうしの価値判断をすり合わせる道具と場が必要で、この貨幣と市場をゆがめたらどうなるかというと、昔のソ連のようになり、今の日本のようになるということです。この点では、市場を大事にする発想を、そろそろ持たなければならないと思います。

特に、地理的に今まで都市ではなく農村だったところは、もう完全に経済メカニズムの中にあるわけです。それとの対抗軸を市場以外でつくっていくのは、私はＮＰＯやＮＧＯを含めて否定的なところがあります。

先程お話にも出ましたが、イギリスのナショナルトラストは、マネージメントをやります。経済組織としてやっていけるように、情報開示（ディスクロージャー）をきちんとやるのです。帳簿も完全な複式簿記できちんとやりますし、企業会計を身につけた人がお金を集め、使い、それを公表し、またさらにお金を集めてくるわけです。何とかお金の話をもう少し大事にした方がいいと思います。

そうすると、逆に言うと行政でやる仕事は限定されてくると思います。つまり、お金の世界でできる仕事をなぜ行政がやる必要があるのかとなります。そこで無理して行政の方を膨らませずに、素直にお金でできる仕事はマーケットにお任せすればいいと思います。

神奈川県でも、いろいろ産業政策を行いましたが非常に難しく、ビジターズ・インダストリーの政策だけではなく、ターゲットポリシー（ある特定の産業を役所が育成すること）はあまりうまくいきません。役所が何かやることが、必然的にある特定の産業を大きくしてしまうことはありますが、それはしかたがありません。しかし、特定の産業の保護・育成に役所がのめり込む政策からは、そろそろ根本的に撤退した方がいいと思います。

ただし、山梨県なら山梨県として、そこで何事かのライフチャンスとビジネスチャンスを求めようという人には、日本のほかの地域に負けないチャンス、インフラストラクチャーを整備しなければなりません。それがなければ人が来ませんし、山梨に来た人は負けてしまいます。そのようなインフラと、失敗した場合の救済のためのネットワークをつくることは大事だと思います。それを越えて何か特定のものを養成・保護してあげようという

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

のは、そろそろ考え直さなければうまくいかないのではないかと思います。補助金行政とどう違ってくるのか。米のかわりに花だといっても、農家はそれで花にするかもしれませんが、消費者の方が米を買わないと同じように、切り花だけなら、いつまで買うのかとなってきます。１つの花がずっとはやることもないわけで、どんどん移り変わっていきます。

そのような、かなり根本的な疑問を感じています。このビジターズ・インダストリーのために、役所が何をやれるのかということです。

私の昔からの説は、人材も企業も足による投票ができる。気に入らなければ出ていけばいいわけです。ところが、自治体は出ていくわけにはいきません。山梨県は日本のあの位置にいて、もちろん合併したりで様子は変わるでしょうが、今の山梨の人は相変わらずそこにずっといる。人間は出て行きますが、山梨県側のものは、そこにいる以外にありません。どこかへ逃げて行って、ほかへ移っていって、何かうまくやることはできません。

そうすると、自治体の仕事とは、その地域で仕事をしたいと思っている人材なり企業に対するチャンスを広げる仕事を、特定のターゲット（標準）に絞らず行うことだと思います。例えばインターネットを使って、どんな新しい事業が出てくるかはわかりませんが、そもそもインターネットの基盤がなければ、そこで何もやりようがないわけです。その基盤をつくるために、ちょうど道路を出ると中央高速があり、山梨の先に中央高速へ入ってくる道がある。そのような情報通信について、山梨で何かチャンスを見つける人にとって、不利にならないような仕事ができるだろうか。

そういう中で、役所として参考的に、「このような仕事もできるでしょう」とか、「今、清里でやっていることはとてもいいことですね」という情報の交換体もあると思います。行政以外でできることはやらないというのが、今行政にとって大事な見極めではないか。前からそうですが、ますますそういう感じがしています。そこのところをはっきりしないので、財政再建が単なるケチケチ路線になり、大した額でもない費用をケチるということになったのだと思います。思い切って、やめてみることも大事かと思います。

それは日本の民間にとっても言えます。中国でうまくやれることを、日本がいつまでも頑張ってやっていたら困るのです。中国が前へ行けません。昔、雁行理論（wild geese flight）というのがあり、先頭を飛ぶ雁はいつも前へ行っていなければ、後ろから来た雁が発展しないと。今、例えば日本が先頭を飛んでいて、ここに韓国がいて、中国、台湾がいる。日本が先頭にいつまでもいると、うまく発展できません。ところが、日本がこちらへ移れば、次の雁は前へ出るわけです。そしてやっているうちに、いつの間にか地位が逆転することもありうるわけです。日本がいつも先頭を飛んで、すべてのものを引き受けている限り、ほかのところはこの地域では発展せず、結局、日本も負けてしまうことになります。それと同じように、やめるべきことをやめて、苦しくても新しいことを見つけるのが基本だという気がします。そのような模索を山梨県もされていることを、今日のお話を聞いて感じる一方で、少しまだ議論に無理がある。特にマーケットで無理があるという感じがします。

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

（松田）　ＩＴやインフラの問題、交通の問題が出たので、犬塚さんの方から、今日の話をどのように受け止めたかという話を、次にお願いしたいと思います。

その前に、今お２人の話を伺って、通産省は予算の非常に少ないところで、文部省と厚生省や農林省に比べて、ほとんどゼロに等しいと言っていいと思います。市場にゆだねることができるものは、みんな市場にゆだねましょうというのが産業政策の中心価値です。そのとき何が一番大切かというと、情報の提供です。予算は少ないが、少し補助金があります。

今日の山梨県の話も、全体のビジターズ・インダストリーの情報については、手塚さんと早川専務（(財)山梨総合研究所専務理事）の２人が今一番、持っていると言っていいと思います。そのグループが方向性を出して、それにちょっと補助金をつける。

これは大来佐武郎さんがよく言われていたことで、１００％補助金を与えると、みんな堕落する。そうではなく、魚の捕り方を教えなさいと。魚の捕り方を教えれば、ずっとそれが使える。食い物だけやってしまうと、食べ終わったら何もなくなってしまう。私はずっと山梨の手塚さんたちのグループとつきあっていて、お金がないから知恵を出してあげられておもしろいのです。お金があると、かつてのようにハード主体の補助金行政になってしまいます。その意味では、今日の後藤先生のお話は、むしろ注意事項を言っていただいたということで、とてもいい方向性で今動いてきたというのが１つです。

２つ目に、このところずっと機会あるごとに言っているのですが、人間と社会で、人間の方が社会よりも強い立場にある。今、社会が本当にだらしなくなっています。今から、１５～２０年くらい前までのイタリアは、政治・社会はメチャクチャだったけれども、家族や人間がみんな楽しんでいました。ところが今、ＥＵが１つになったとき、スピリット・オイローパで、ヨーロッパのスピリットはイタリアからと。イタリアの政治もわりにきちんとしてきて、あっという間にここ１５年、文化領域でイタリアの魅力はフランスよりも出てきているのではないかと思います。それに乗って政治も立派になってきたと思います。

今、長野県もそうですし、山梨県も、日本全体もそうだと思いますが、結構みんなきちんきちんとやっている人たちがいて、この人たちは県からサポートを受ければ、受けないよりはるかにいいと思っている。けれども、実際は自分の犠牲で「これしか俺の生き方がないのだ」ということをやっているわけです。赤字がいくらあろうと、とにかく楽しくてやっているわけです。これがやがて、先程のイタリアのようになっていくプロセスの中にあるのではないか。つまり、社会よりも人間が強くなったときの人間と社会のありようを、インターネットはサポートするものではないかと思い、いつも「犬塚さん、きちんと我々の世界をサポートしてくださいよ」と言っているわけです。それを前置きにして話していただけますか。

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

２−１０　「ビジターズ・インダストリーとＩＴ」

（犬塚）　私も、後藤先生のおっしゃるマーケット、メディア、トレードのシステムが非常に重要だと思います。歴史的に見ると、マーケットやメディア、トレードは、自動機械として今、動いているような印象が我々にあります。しかし、もともと自動機械として動いていたのではなく、商業には、倫理、あるいは社会的な徳として何がいいかということによって、いつも批判や検証にさらされて動いてきたものだと思います。

それでは、どういうものが価値として、社会的に合意を受けるのかということについて、現代社会では一方的なマスメディアのシステムに集約されることとなっています。それが、自動機械の方向へ社会の仕組みを変えてきたのではないでしょうか。単一の価値によって動かざるをえないか、あるいは単一の価値が信じられなくなったので、価値などは関係なしに動くという、自動機械になってしまったということです。

インターネットの時代は、それに対して、みんなが、何のためにこのビジネスやこの行動を行うかということを、試される時代だと思います。松田先生のお話の中で、ディズニーをもうけさせるためにミッキーマウスを買うよりは、少しはイギリスの自然に貢献するように、『ピーター・ラビット』を買おうと。実際、ナショナルトラストのビジネスは、絶対にまけないとか、物としての価値より高い物を売るとか、少々横暴にもみえることがあるのですが、それを買う方は納得しているようです。それは、後ろにあるミッションというか、価値についての合意であり、自動機械に任せることの対極のひとつともいえるでしょう。

マーケットやメディアと、価値について、社会的でしかも多重・多層・多面的なかかわり合いをつくっていくことを、ネットの社会が可能にしていく。これは新しいメディア技術がもたらす可能性ではないかと思います。

少し資料を用意しましたので、時間がないので簡単にまとめたいと思います。

（１）ネットワーク社会と産業構造変化の観点から

ネットワーク社会と産業構造変化がどのように起こっているのかということと、ビジターズ・インダストリーをどう位置づけるか、ということが１つあると思います。

もう１つは、ネットワーク社会において、「地域」についての考え方が少し変わってきているのではないかと、地域経営という観点から問題を考えることでまとめてみました。

１番目は、これまでの産業分類を、ネットワークの面から見ると少し変わってくるだろうということです。これは野村総研の人が作った表です。この内容に、私自身が全く納得しているというわけではありませんが、おもしろい見方です。上の横の軸はその産業を作り出すために入れるものです。産業というのは何かを入れて何かを出すと考えると、入れるものとして情報の分が多い・少ないということを示しています。左側が多い、右側が情報が少ない。逆に言うと物が多いということです。縦の軸はアウトプット（所産）です。上の方が情報が多い、下の方は情報が少ない（物が多い）。一番上の情報をたくさん入れて、

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

情報をたくさん出すというのは、放送事業などです。一方、物を入れて物を出すのは、農林漁業や小売りだろうと配置し直して、情報のインプット・アウトプットの面から、既存の産業分類をもう一度やり直す。そこで地域の産業を見直してはどうかという提案です。

この表自体には必ずしも納得できないところもあります。例えば福祉は、現実には人がやるわけで、情報などは入る余地がなく、情報を少なくというかたちに見えます。しかし実際は、福祉システムを効率的に運営するためには、今日のコンビニ以上に情報システムを入れなければならず、そういう意味では、ここに置いてあるもの自身が適切かどうか。それは別にして、このようなかたちで見直しをしてはどうかという１つの提案です。

２番目は、新しい産業構造をネットワーク側から見直すと、物を作る産業と、物を消費する人々という受け方よりは、何が欲しいかということが、暮らしや生活の必要から出てきて、それに対するソリューションとして物を作り出すという動きが、新しい産業構造として生まれつつあることです。逆に言うと、生活という舞台を知識創造の場として見よう。つまり、これまでの商品を作る知識創造が生産の場に位置づけられていたことの逆です。その逆転構造と可能性としての地域の持つグローバル性が重なります。つまり、生活を大切にするところでこそ、新しい産業を作り出せるというタイプの構造が、生れる可能性があるのではないでしょうか。コミュニティに特化したビジネスが、グローバル化するという流れを、つくっていけるのではないかと思います。

それでは、どういうものをそのようにできるか、机上の空論ではなく、具体的にテストケース（トライアル）をやるための場や装置として、エコマネーをとらえることができるのではないでしょうか。エコマネーというのは、既存の貨幣との交換可能性を持たない通貨です。つまり、従来の仕組みではお金を払えないことだが、価値は大変にあるというものについて、それを社会的に明らかにしていくための手法として、エコマネーは効果があります。一方、エコマネーの実際の事例はそうではなく、商品券のようなことをやっている例が多いようですが、コミュニティにとっての価値を引き出す仕組みとして、つまりコミュニティビジネスをつくり出すトライアルの場としてとらえる見方もできると思います。

（松田）　彼は、これからは生活サイドから産業を興す時代だということを、ずっと学生に教えてくれています。生活文化の時代である。文化というのは、精神・心とかかわりがあります。

そうすると、先程の山梨県の事例は、まさに企業で言えば生活・文化の創造なわけです。つまり、研究開発機関なわけです。基礎研究、応用研究、商品化研究のところまできて、これをどうマーケットに出そうか、というところへ今来ているわけです。それでは、これ自身に広告主・スポンサーをつけることができないのか。例えばトヨタやアサヒビールをつけることができないのか。これをさらに教育素材、またはメディアが非常に多様化してくるわけですから、メディアで放送する、買い上げてもらうこともできるわけです。スポーツの場合と同じように、スポンサーをつけることもできるわけです。

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

ですから、マーケットに後藤先生ができるだけ渡せというとき、今まで市場に出られなかったのは、研究開発のピリオドにあったので商品として出せなかったけれども、いろいろなステイタスが生まれ、例えばボリショイでやったとか、こういう賞をもらったということで、もうマーケットに出していいという出し方のサポートを、県が上手に手伝ってあげることはありえると思います。

先程のバレエのようなものは、ファッションの世界でも化粧の世界でも、いろいろなインダストリーが中心価値を必要と思っているわけです。今、中心価値のないインダストリーは、衣食住のどのインダストリーでも成り立たないと思います。そのようなことで、この図式を、犬塚さんのＩＴの方に乗せてやるという可能性はあると思います。

（２）　地域経営の観点から

（犬塚）　一方、そのような価値や知識創造をする場としてのコミュニティを、地域経営という観点からみた場合に、どのような政策がありえるでしょうか。

今日、地域経営の問題として、コミュニティという枠組で議論されている問題の中では、多くのパーセンテージをとっている問題が、子供問題・子供の精神的安定の問題です。例えばいじめは、どのような地域で起こっているかという統計が出ていますが、ほとんどがコミュニティとしての歴史を持っていない新興住宅地です。また、昼夜の人口比率が大きいところ。つまり、お父さんが昼間はいない地域です。そして核家族化が進んでいる、つまり、社会の成員が不安定で、歴史的な面でのまちづくりの構造が不安定なところで、この問題が起こっていると言われています。このことと先程の価値づくりの問題とは、別の問題のようですが、つながってくるだろうと思います。生活を大切にするところから、ビジターズ・インダストリーというかたちが出てくるという見方です。

もう１つは、子供の精神的安定はもちろん、大人の精神的安定でもありますが、生活実感がどのくらいつくられるかという点です。１つには、職と住との関係が不安定化しているということです。先程、早川さんの記事の中に田園都市の話がありましたが、あれに出てきているニュータウン（新しい町）は、職と住が自立的にある郊外都市です。つまりベッドタウンではありません。この考え方が、今の地方について生活の充足を求められる面だと思います。つまり、昔で言うリゾートのように、仕事がなく遊びの空間だけがあるのではなく、むしろ職住のバランスのとれたところを見に行きたい。それは農村に対するあこがれかもしれませんが、そのようなものをネットワーク技術でつくり出す可能性が期待できます。

具体的な政策の問題から考えていく際には、基盤領域とアプリケーション領域の区別をすることが大切だと思います。まずインターネットでアプリケーションどうのこうのと言う前に、インターネットのできる環境を行政がつくりあげられるのかという基盤の問題があります。行政にお任せだけではなく、基盤づくりが進んでいますが、そのような基盤についての考え方と、アプリケーションについてのルールは別々に考え、それぞれに対する

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

効果を図っていくことが必要だと思います。というのは、基盤の部分はエリアがかなり限定されますが、アプリケーションは今はもうエリアを越え、他地域との相互関連から成り立っているところがあるからです。

もう１つはネット自体に限ることですが、ネットの問題は一気に世界化してしまうとは限らず、地域経営の問題としてみると、リアルな部分とバーチャル・サイバーの部分とを、同じ面で考えなければならないところがあります。イントラネット（地域集中）の技術活用面ともいえます。実は、今の社会では農村でも隣人は案外遠いのです。近くにいるけれども、あまり交流のない隣人が、ネットを使うことにより活性化され、コミュニティが生まれてきます。

横浜泉区で「緑園都市実験」が１年半ほど行われましたが、そのような実証実験報告がいくかつ出てきています。生活者が知識創造をしていくとか、コミュニティの価値をつくっていき、それで生産へ循環していくような流れは、ネットをリアルな特定地域に集中的に導入することにより、促進されるといえるでしょう。

（３）２０００年の『インテリジェント都市賞』は米国の地方都市に（巻末資料⑤参照）

去年の８月に出たネット関係の記事の１つです。ワールド・テレポート・アソシエーション（ＷＴＡ）というネット関係の大企業が集まっているところで、世界ネットワーク都市大賞（インテリジェント都市大賞）を行っています。９９年から始まり、２０００年が第２回でしたが、２０００年に賞を取ったところが、アメリカのジョージア州の人口３万人弱しかいないラグレーンジという都市です。これが非常におもしろかったです。

なぜラグレーンジに賞を与えることになったのでしょうか。地方都市というのは産業が衰退するときに、一気に町がどんどん衰退していくのが明らかになる。多くの人がそれを経験してきた。一方、ラグレーンジ市は、これからのネット時代に向けて、人口３万人しかいないところに光ファイバーを投入し、全住民に対してブロードバンドでのアクセスを無料で行ったのです。それにより産業誘致や自治体の電子化について集中的に行いました。１つの産業が失われて次の時代に移っていくとき、都市の経営側が次に出すビジョンを具体的な形として示した例です。そのことがこの小さい都市を受賞にも導いています。

都市に対する情報技術の投入について、量と質の面で言えば、もちろん２７,０００人の都市よりはすごい都市がたくさんあるのですが、政策面でのおもしろさがこの都市にはあります。一方、新しい産業を誘致するという意味においては、高度な情報インフラがあれば誘致できるという面からみれば、新しいタイプのやり方ではなく、昔風ともいえます。

（松田）　それでは、中田さんに話していただき、次に小田さん、小坂井さん、問題提起の手塚さんがそのあとを受けて、どのような点がこのセッションで参考になったかを整理したいと思います。

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

２−１１　ローカルとグローバル

（中田）　先ほど、バレエのビデオを拝見し、大変面白い試みであると思いました。また、こうした催しを続けて行くためには、主催者とバレエ団の皆さんが大変努力されているのではないかと感じました。

文化イベントの問題として、収支をいかに合わせるかという問題があります。ドイツなどでも、同様で、かつて王侯貴族に愛され、ブルジョアに引き継がれたオペラやバレエなどは、自治体の補助金がなければ成立しません。一方、６０年代以降の若者文化のポップコンサートなどは商業文化として、成功しております。そうしますと、一部の趣味の豊かな、経済的にも豊かな一部の人しか享受できない、歴史的な高級文化になぜ補助金をつけ、ポピュラーな文化や大衆趣味の文化はそうでないのか？という問題がでて参ります。そこでドイツの文化政策では、大衆文化や若者文化にも文化政策の対象として奨励しようとしております。日本では、まだまだ文化政策は体系的にはなっていません。従って、愛好者がいて、仲間を集め、バレエ団の協力を得ながら運営されているこうしたケースでは、関係者の皆さんが大変努力をされていると感じました。こうした文化活動を継続していくためには、やはり運営体制の確立が必要になるものと感じました。

現在、全国各地の地域情報がインターネットで簡単に得ることができます。山梨県の温泉や様々な見所について、インターネットで簡単に知ることができることは良いことですが、最終的に何処に決めるかという段階では、友人知人のアドバイスなどを聞いて決定するのが一般的です。ある種の質問やアドバイスを電子メールでやりとりができるような情報サービスがあると、その地域に対する親近感も深まるのではないか？そうしたインターラクションが次のサービスになるものと思います。

（松田）　小田さん、お願いします。

（小田）　先程、松田先生から広告がつけられないかということがありました。私も話には聞いていましたが、あのようなすばらしい舞台だとは、今日ビデオを見て初めて知りました。

広告よりも、今は番組のコンテンツの絶対数が足りません。必ずしもバレエがどれだけの視聴率を取れるかではなく、これだけ続けてきたものを、広告をつけることよりも、コンテンツとして利用できないのかなと思いました。

逆に言えば、この萌木の村の方たちが、どのようなコンセプトで何を目的としてやられているのかわからないので、ただ広告をつけて資金のたしにして、云々というと、「要らぬお世話です」と言われてしまうかもしれません。しかし、番組のコンテンツづくりとしては非常にいい、立派な内容のものだと思いました。

たぶんＢＳ、ＣＳが１００以上の多チャンネルになっている今日、このような素材が欲しい局が必ずあると思います。先程のバイオリンも、コンサートとして非常にユニークな

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

コンサートのはずです。そのようなものが、山梨県に来た人たちだけではなく、情報を発信するという意味でも、コンテンツの１つとして、ＢＳなりＣＳ、もちろんどこの自治体でもかまいませんが、売っていく方法を考えることは非常に重要ではないでしょうか。そのことが、逆に言えば山梨の各地でやっているイベントに付加価値として戻ってくるのではないかと思います。

広告という立場からすると、今は大変難しい時代であり、どの企業もメセナや文化活動に対するお金が厳しくなっているのが現状です。広告ということでお金が出るには、少しローカリティすぎると思います。それを素材とし乗せられれば全国へ行けるわけですから、そのようなかたちの、ただ単に広告ではなく、コンテンツとしてその番組を提供してもらうというかたちのセットで考えられるといいと思います。

もう１つは、インターネットなりホームページなりで紹介されているのでしょうが、やはり情報発信のしかたが重要です。私は清里まで車で２０分くらいのところに毎夏出掛けています。清里にフィールドバレエがあるのは知っていましたが、１度も行ったことがありませんでした。先程これを見て「絶対に今年は行こう」と思いました。行きたいとなるまでの情報の発信が、どこへだれに向けて、どのようにしているか。それをもう少し考えなければ、ただ単にホームページに情報は載せています、ということだけではだめです。やはりどのターゲットに、どのような人に来てもらいたくて、どのような方法でそれを発信したらいいのかが、次に重要になってくると思います。これはもう、文化活動なのですから、地元の方の日常の活動、つまり、最初にお話ししました枠組での地域意識・役割意識、生活確信のコミュニティの活動が重要だと思います。

私は、小淵沢というか長坂に小屋がありますが、ほとんど観光地には行きません。大体２週間くらいいますが、ほとんど草むしりをやっています。その方が観光地へ行くよりもずっと楽しいのです。ということは、八ヶ岳の南麓は種々雑多な雑草の宝庫で、いろいろ見たことのない雑草がたくさんあります。放っておけばすぐ伸び、そこに雑草があることによって、東京にはない植生があり、虫が来たり、鳥が来たりします。そして飽きないのです。大体近所の観光地は一とおり見てしまっていることもありますが、二度行きたいようなところはあまりありません。再訪したいと思わせる動機付けとなるものがないからだと思われます。子どもにせがまれまして、プールには必ず連れて行くようにしています。山梨に来てなぜ水泳なのかわかりませんが、必ずプールに行くという条件で、彼女たちはついてきてくれます。これも１つの動機付けです。私は１日庭で草むしりです。

先程、農業の話も出ていましたが、体験農業でも何でもなく、あそこで物をつくったり云々ではない。逆に言えばそういうものが減ってきている寂しさもありますが、やはり私は東京で育ち、田舎にあこがれがあって、田舎暮らしのような夢があります。それこそ戦前生まれですので、自分の家というと草花がたくさんあった幼いときの体験が、今もう一度経験できるという喜びがあります。ですから、自分の夢があり、その夢をどこかで、自分がすでに経験してきたようなものが出現できるようなところへ行きたいし、そういう場

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

所がいい。その情報が自分にヒットすればすぐに出掛けていきます。
　体験の追認のようなかたちになるのかもしれませんが、知らないところへ行くのはアドベンチャー（冒険）でいいわけで、未知の世界へ行けばいいわけです。ある程度どこかに情報があり、自分がビビッドに反応できるのは、自分が今まで本で読んだり映像で見たり、すでに知っている場所へ追体験の確認として行くような気がします。そのような情報が必要なのだという気がすごくしました。
　また、先程犬塚さんのおっしゃった生活産業、においのするもの。におわないものでどんなにきれいなものを並べられても、やはり欲しくはありません。そこの場所場所にあるにおい、そこから来ている生活のにおい。そして、逆に言えば私のにおいが発信できる。そういう面では、先程中田先生から、両方がどのようにうまく会話ができるのか、まさにそういうところがビジターズでは非常に重要なところだと思います。

（松田）　小坂井さん、お願いします。

（小坂井）　今、全国どこでも、といっては語弊がありますが、とにかく全国各地が総観光地化・地域興しに必死に取り組んでいるといっても過言ではないと思います。新施設を建設し新しい観光スポットを作り出したり、文化イベントを開催したり、と方法は様々ですが、来訪者としてのターゲットは例外なく「都市生活者」ですから、どの地域・地区も「都市生活者」に向けてラブコールを送っているわけです。
　こうした状況を「都市生活者＝みやこ」からみてみると、殆ど同じような情報発信で、そこでしか体験できない“中心価値に基づいた形態価値”を発信して、かの地を訪れてみようと動機付けてくれるところはあまり多くない気がします。
　「集客交流産業」とは読んで字の通り、沢山の人にその地に足を運んでもらい、ただ通り過ぎるだけでなく“交流”してもらうことで、その地に留まったり繰り返し訪れてもらい、産業として幅広く活性化するのが目的です。交流は必ずしも地元の人との人的コミュニケーションの関係のみをさすのではなく、その地の自然やそこでのたたずまいや暮らしぶりとの交流、いってみれば都市生活者がその地で得られる自分自身の心との交流をも言うのではないでしょうか。
　新しい施設や文化イベントやエンターテイメントでいえば、都市にこそ集積されていて、都市ほど面白いところはないのが現実だと思うので、各地がただ素敵な観光施設をつくったり、高品質な文化イベントをやってもそれだけでは都市生活者がその地を訪れる動機付けは薄いと思います。
　つまり、都市では味わえない、そこにしかない“唯一性”があるかどうか。ビデオで見させていただいた、萌木の村の「野外バレエ」は素晴らしいと思います。夕暮れの山並の風景と相まったバレエは都市にはありません。ぜひ続けていってほしいです。全英オープンゴルフや全英オープンテニスが１００年以上の歴史を持っているのを聞くと、「儲からな

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

いから辞めよう」という経済原則だけでなく、１００年とはいかなくても、２、３０年先を見越した行政と一体となった、価値創りとコンセプトとが必要なのではと思います。

同じような視点から、山に囲まれ甲府盆地を持つ山梨県全体の地形から巨大な円形舞台に例えた「円形大劇場・山梨」という考え方。すでにその芽は各所に点在しているし、これは魅力的ですね。

銀座の、ある画廊の方からお聞きしたのですが、第２次大戦での敗れたドイツ、イタリアは贖罪のひとつとして、ビエンナーレなど文化・芸術を新たに創り出すことやその育成に力を入れている。日本は経済的には物凄い復興をとげたのに文化を創り、守る努力を世界に向けてしていない。それを日本のどこかから世界に発信していかなければならない。日本の画廊の２分の１が集まる東京、その半分つまり日本の画廊の４分の１が集まる銀座がうってつけなのだが全くスペースがない、とのことでした。

「環境首都・山梨」は東京都の位置といいまさに「芸術都市・山梨」としても世界に発信できるのではないでしょうか。文学という文字で、美術という絵画や彫刻で、人間そのものが表現する「音楽や演劇、舞踊」など、まさに「円形大劇場・山梨」はたくさんの“動機付け”を秘めているのではと思います。

（松田）　それでは、熱弁が２人３人続いたので、休みを入れてから手塚さんの話にいきたいと思います。

（手塚）　いろいろなご指摘ありがとうございました。

まず１つは、後藤先生、犬塚さんからご指摘のあった、マーケットとメディアとトレードの関係で、グローバル化という話があります。私もマーケットを無視することを考えているわけではありません。そうではなく、そもそもすべての分野におけるグローバル化などということがありえるのか、ということが前提です。そもそも思想はローカルであるという前提に私は立っており、ローカルなところから様々なものが生まれてくる。それらの中から、グローバルになって良いものもあるし、なる必要のないものもあります。従って、完全なグローバルな市場が存在すると考えるのは、間違いではないかということです。例えば、信号がどこの国へ行っても青で進め、というグローバリゼーションはあってもよいのですが、そうでないものは何が何でもグローバリゼーションという必要はないのではないかという感じがしています。

たまたまウィリアム・ペティが、『政哲算術』の中の「アイルランドの農民」という一節で、「アイルランドの農民は自分が必要なだけ働き、農産物を作り、自分に必要な服だけを作り、それで満足している。だからアイルランド人はだめなのだ」とペティは言っています。ペティは、もともとアイルランド出身で、アイルランドからイギリスへ行き、イギリスで売れっ子経済学者になりました。２０世紀後半まではペティの考え方が支配的でしたが、２１世紀も間近となり、どちらかというとアイルランドの農民の考え方は、否定され

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

るものではないという思想的な流れが出始めているように感じます。

ですから、量として当然、ローカルがグローバルを凌駕することはないのですが、質や思想においては、常にローカルの主張が前提として存在すると、先程申し上げたようなことがあるのではないかと思います。当然ある部分でマーケット機能が働かなければなりませんが、それとは別にローカルな市場、あるいは市場経済とは異なるメカニズムが機能しなければならないところもあるのではないか、という感じがしています。

次に生活産業のところで、まだ企画段階の話なのですが、今度のフィールドバレエの中で、バレリーナに山梨で作っているジュエリーをつけて踊ってもらい、終わった後にジュエリーのオークションを開催しようという動きがあります。それからさらに将来的な課題として、バレエ団のコスチュームも、甲斐絹のテキスタイルで作ろうかと考えています。これはなかなか難しいかもしれませんが、ジュエリーの方は実現すると思います。

こうしたバレエに付随した仕掛けは、中田先生や小田さんからもご指摘がありましたが、ホームページ、あるいは新聞媒体で発信するだけでよいのかという疑問があります。そのことを突き詰めると、生活文化全体で訴えていく、それはテキスタイルであったり、ジュエリーであったり、音楽であったりしますが、こうしたことが必要ではないかと思います。

もう１つ、犬塚さんから、生活を大切にする産業が進化していくと、グローバル化するというご指摘がありました。確かにそのとおりだと思います。しかし、割り切れないところは、年代は曖昧ですが、確か１９７６年のパリのワイン品評会で、初めてボルドー産ワインがカリフォルニア産ワインに負けました。カリフォルニアのロバート・モンダビが初めてボルドーのワインを破り、優勝した年です。それまでのカリフォルニア産地が何を追求してきたかというと、ボルドーの土壌と同じ土壌を造り、同じブドウを作り続けてきたのです。

しかし、それでは限界があることに気づき、カリフォルニア独自の土壌で在来種ブドウを大切に育て優勝したのです。それでは、カリフォルニアワインが、今日グローバルになっているかというと、決してそうではなく、ボルドーはボルドーとして依然として残り、カリフォルニアはカリフォルニアとして産地を形成しています。

多分、飯田さんもそういうことをおっしゃっていると思いますが、グローバル化を単一市場で捉えるのは難しいのではないかと思います。輻輳的にいろいろなものが重なってきて、それが多分グローバリゼーションを形成しているのかもしれない、という感じがしています。

中田先生の方からは、最終決定をするインタラクティブをどうするかという話がありましたが、この点は今、非常に悩んでいるところです。確かにこれまでインターネット社会が進んできて、先程のような情報ネットを介して情報発信すると、何もかも本物らしく聞こえますが、本物とは何かということになると、明快な回答はありません。これから理論化しなければならないと思います。

ヒントはこの前、飯田さんのところへ行って伺った話の中で、「どの時代にも、いずれの

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

時代にも、きっとバッハやモーツァルトはいたはずだ。しかし、時代や地域が要請したかどうかが問題となる。時代や地域が要請すれば、必ずバッハやモーツァルトは出てくる。」という指摘の中にあるような気がします。要するに、どのようなインタラクティブを与えるかは、我々の精神のありようではないかという感じがしています。

（松田）　それでは、次は私のプレゼンテーションと議論をしていただき、これを最終セッションになるようにプレゼンテーションしようと思います。

（犬塚）　その前に、先程申し上げたグローバル性は重要なことなので、少し加えたいと思います。ローカル、グローバルの区別について、地域や空間によってとらえるという面では、もうすべてグローバルでとらえるべきだと思います。例えばバレエについてチケットを買う。つまりその価値を認めるというときは、その価値において集まるクォリティーを前提にして考えるべきであり、山梨の特定の場所にかかわった人ということで考えるべきではないと思います。価値や意味がつくり出しているコミュニティをまず最初に考え、地域の生活価値を考えるときに、特定の領域ではなく、もっと広くとらえていく見方です。

つまり、特定の生活価値や文化価値に対して共感を覚える人、ある一定のスタイルにおいて共感する人たちが、１つのコミュニティをつくっていく。それに対して行政は何ができるかということです。中田さんのおっしゃった最終決定はどのように行われるのか。確かに情報発信していけばよいのですが、“発信”ということは、今のネットワークの見方からすればむしろあまり重要な言葉ではありません。みんな発信しているのであり、それに価値をおくのはマスメディア的なの発想です。むしろ、決定はコミュニティが行うのです。

つまりだれかが、これがいいということを発信し、それにみんな倣えではありません。「こういうことがあってよかったな」、別の人が「あれよかったよね」「そんなにいいの」と伝えることによって出来上がるコミュニティ、つまり特定の価値観・スタイルを持ったコミュニティが決定するのです。だから、最終的なバイイングについて行政が支援しようとするとき、コミュニティでいったいどのようなものが生まれていき、またコミュニティをどのように促進していくべきかに対して力を注ぐべきであり、コミュニティをよく見なければなりません。

先程挙げた安曇野の例では、行政側がそれについて、異なる対応をしているところがあるのではないかと思います。つまり、安曇野の価値について、ネット上のコミュニティが出来上がり、また地域の人々も、その価値に合わせた行動をしだしている。それに対して行政は、道路の整備が中心のようです。高速道路から常念のふもとまで広い道路ができてしまいました。コミュニティを、行政の方がよく見ていないようにと思います。コミュニティの価値について理解する。コミュニティの中で、どのような価値が生まれていくかを見る。行政のやるべきことは、最終決定に関わるコミュニティについて、そこのスタイル・価値をよく見て、それについてのサジェスチョンをするところではないかと思います。

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

（手塚）　最初の「空間としてはグローバルと考えるべき」というのはどういう意味でしょうか。

（犬塚）　例えば先程おっしゃったアイリッシュの価値について、そのスタイルや商品がアイリッシュの人たちだけにかかわるなら、それは昔風の２０世紀、あるいは１９世紀のあり方です。しかし今では、その価値のスタイルに共感する人が、ニューヨークにもいるかもしれない、日本にもいるかもしれない。いろいろなところにいるわけです。むしろそこでつながってゆくわけです。

（手塚）　先ほどの話には続きがあります。例えば、九州で稲作に携わっている農家の中に、雑草とヤドカリを使い、無農薬で微妙に水分調整をして稲作経営を成功させている人がいます。しかし、それは九州の水田だからできるので、寒い山梨の水田ではできません。要は、場としてローカル性は必ずあるのではないか、ということです。

（犬塚）　もちろんそうです。それは、ローカル性ではなく、風土性としてとらえるべきことですが。

（手塚）　それはそれでよいのですね。

（松田）　その問題から始めてもよいのですが、それでは次のセッションを行います。

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

セッション３　「グリーンツーリズムの理念と方法-山形県西川町の事例報告」

３−１　はじめに

（松田）　マルチメディアのＩＴの話を１年間、犬塚さんに講義をしていただき、私の方は関連でゼミ生にこのような話をしました。どういうことかというと、「象さんから象の鼻を取ると象でなくなる。キリンからキリンの首を取るとキリンでなくなる。ゲーテの友達のヘルダーはそういう比較を行い、人間からロゴス（logos）を取ると、人間が人間でなくなる。したがって、人間の本質というのは理性と言語を持っていることである」と言ったのです。「人間の本質は理性に裏付けられた言語を持っていることである」。ギリシャで言えば、「ロゴス」ということです。今の人たちはロゴスを使い切っているかと議論させると、学生たちの認識は、ロゴスを使い切っていないということになります。そうすると、人間が人間でないことになります。

次に、どうすれば人間が人間になることができるか。人間性の回復とよく言いますが、ロゴス・持っている能力を使いこなすことである。それでは、どうすればできるかという話になっていくわけです。

そこでこのような話をしました。岡倉由三郎という岡倉天心の弟が、ヨハネ伝の最初の聖書の訳のところに、「初めに道ありき」と訳し、「道」に「ことば」と仮名を振っていました。「初めに道（ことば）ありき」と。当時の国学者は英語の先生で、かつギリシャ語を知っており、ギリシャ語の聖書があることも知っていました。「初めにロゴスありき」とギリシャ語では書いてあるわけです。それを「初めにことばありき」と訳すと、理（ことわり）という意味が消えてしまうので、道理の道を書いて「ことば」と、ものすごく苦心した訳であると書いてあります。

日本でも「みこと」という言葉があり、「こと」というのはいろいろな意味を持っていて、それに「み」を付けて「みこと」。「尊」「命」と書いて「みこと」とも読みます。日本でも「言霊」という「ことわり」の意味を、大和言葉に最初から入れていました。そういうことをよく知っていたので、国学者が聖書を訳すときにものすごく苦労して、「初めにみちありき」と訳したと書いてあります。

それでは、「ロゴス」というのは何なのかと学生たちに議論させると、結局、人間は生まれる以前のことも認識することができるし、死んでから以降のことも認識します。それに対して動物は、どんなに利口なワンちゃんでも、生まれる前のこと、死んでから以降のことは認識できない。つまり、客観的な生まれてから死ぬまでの時間・空間の経験だけは認識しているけれども、それ以後の認識はない。そうすると、動物は客観的な時間・空間に認識が閉じ込められていることになります。

それに対して人間の場合は、客観的な時間・空間を人間の認識は支配することができる。ということは、人間の認識は本来、客観的な時間と空間の制約を受けないという話から、

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

インターネットはその意味で、人間の認識の究極の商品である。時間・空間に拘束を受けず、居ながらにして世界を認識することができる。これがグローバルである。つまり、認識が空間上だけではなく、時間的にも過去・現在・未来を自由に認識できる画期的な製品を開発したというのがインターネットである。そういう話から、犬塚先生の授業をきちんと取り、技術を身につけなさいと言っています。

彼の話は難しいので、このくらい動機づけてから、犬塚先生の勉強をしなさいと言うと、４年生でも単位にならないのに取る子たちが何人もいて、このような動機づけは案外効くのだと思いました。

３−２　雪国に魅せられた詩人・丸山薫

学生たちに丸山薫という人の詩を朗読させました。堀辰雄、立原道造、丸山薫が田舎に住むのですが、丸山薫だけがとんでもないところに住むのです。山形県岩根沢（現・西川町）です。雪の中へすっぽり全部入るようなところで、来週行くのですが、今年は６m降っているといいます。雪下ろしではなく、雪上げをする。普通は屋根から下に落ちるのですが、雪の上から屋根へ落ちて骨を折り、消防自動車が来るというくらい、今年は雪が降っています。

そこに行って丸山薫が詩を創りました。「ふり固まった冬の雪の上に　柔らかな春の雪がつもり　新しい雪は古い雪になずまず　麗(うら)らかな日の午前　不意に　沢の斜面を辷り始める　なんの物音もなく　寂かに　しかし、きららに　魔の速さで　それを切り立つ崖から絵のような煙となって　谷の底へ落ちちらばう　谷底の楢の木の洞(うつろ)から　空を覗いていた仔栗鼠が一匹　こっそりと息絶える」。雪のあおりを食って死んでしまったということです。

次は仙境です。「年ごとに　深山の岩のところどころに　いちめん　山葡萄のふさが覆い嶮しい谿間の繁みがくれに　あけびの実がたわわにさがり　昼も昏いブナの森の奥に　なめこの暈が虹を放つ　また　しめじ　まい茸　やまどりなどの　無数のきのこが木の根を埋める　それら　天然の無限のみのりは　幾重の絶壁　嶺の屏風を隔てて遠く　人の眼にふれぬ仙境にあって　そのところを知るものは　山の家の主人（あるじ）達よりほかにない　秋がくれば　かれらは雲を踏み　霧をくぐって　秘かに己が狩場を訪れ　それぞれの背負い籠を満たして　真夜中　星の下を帰ってくる　秘密は決して人に語られず　かれらが生涯を終えるとき　初めて　その息子に洩らされる　息子はまた孫に伝え　かく　永代にかけて山の生活（くらし）のあるかぎり　その家の主人だけが知っている」。

もう一つ読ませていただくと、「嶺を攀じ　谿をわたって　もう　何里踏み分けたろうときおり　霧の雫する　深山林(みやまばやし)の昏(くら)みに　今年もまた見つけた　ひとかかえに余るブナの切り株！　隙間もなく　びっしりと　それを覆うなめこの族性を！　おりから　時刻もさだかでないが　梢を洩れるかすかな陽光（ひかり）に　七彩の虹を現じてかがやく　幾千の暈(かさ)の瑞々しさ　ああ　神秘　と　さすが　山育ちの己でさえ　しばらくは欲も得も忘れて　手を拱いて　ただ見入る　おのずと腰をおろす倒木の幹の上　ともあれ　一服を　革

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

の煙草入れを抜きにかかる」。
　このような句集が最近アメリカで翻訳され、向こうの教育にもこの詩が使われています。もっとたくさんあるのですが、この詩をずっと読み上げてから、学生たちに「どうだ」と言うと、山形の３ｍとか６ｍの雪を見に連れて行ってくれと言うのです。

３−３　いきいきした西川町の観光事業企画
　戸川幸夫という先生が、『かもしか学園』という西川町を舞台にした動物物語を書きました。その人を名誉園長にし、作家の加藤幸子さんを園長にして、私が事務局長で「かもしか学園」をつくりました。そこに、大正５年生まれの志田忠儀さんという、朝日連峰を舞台にして生きてきたマタギの人がおり、春にはクマや山菜採り、夏は渓流釣り、秋はキノコ・アケビ、冬は狩猟という生活をしていました。
　多くの人は、なぜブナをそんなに大切にするのかを知りません。そこで、この人を呼び、「かもしか学園」で東京から来た人たちに講義をしていただきました。そのときの内容がこのような内容です。

　「この地域はブナの原生林に恵まれている。ブナは４〜５年に１度豊作に恵まれる。ブナの実が豊作のときは野ネズミが繁殖し、それをエサにするリス・テン・イタチ・ヘビなどの動物が増える。そして、それを食べるタカ・ワシ・トビ・フクロウの肉食の性質の荒々しい猛きん類が増える。動物だけでなく、キノコもブナのおかげである。ところが、戦後ブナは何の役にも立たないとどんどん伐採されてしまった。山を知らない人たちが、新しい時代の農山村行政にブナ林はいらないと考えたのだろう。ところが、朝日連峰にもその影響が出てきて、ここのブナ林は取り返しのつかないほど伐採されそうになった。もしそうなったら、自然の生態系だけでなく、都市部の環境までおかしくなる。そこで秋田営林署や林野庁、環境庁に陳情し、朝日の環境問題を行った石さんや毎日の山田さんに応援してもらった」。
　彼らも、それまで自然環境など何も知らなかったわけです。ところが、志田さんと出会ったことで、自然環境の大切さが初めてわかりました。そして、志田さんが自分の経験を何度も話しているうちに、学術的な論文になってしまいました。自分の人生を語っていると、それが自然環境の問題の人たちにとって、ものすごく重要なテキストになりました。そして、この人の生き方を知りたいという人たちが、どんどん春夏秋冬来るわけです。それが志田さんに案内され、自然の世界を現実に知るツアープログラムになりました。
　ツアープログラムにした人たちは何かというと、私と大川という山大の先生と、森岩男という森をやっている人の３人で、西川町に塾をつくりました。それぞれ３塾をつくり、私のところでも１４〜１５人の人を１０年くらいやりました。その人たちが、志田さんの春夏秋冬のライフスタイルを商品にしたのです。そして自然のアウトドアライフとは何かという、アウトドアライフそのものが志田さんのツアープログラムになり、それでご飯を

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

食べているわけです。彼らは、そんなにもうからなくても、楽しみながらご飯が食べられればいいという人たちなのです。

人口８,０００弱くらいのところに、１４～１５人リーダーをつくるとどうなるか。塾生たちが中心になり「月山・朝日ガイド協会」をつくり、初級・中級・上級コースをつくりました。例えばクロユリの花が咲く季節になると「クロユリコース」、狩猟のときには「狩猟コース」、渓流釣りのときは「渓流釣りコース」、キノコ採りのときは「キノコ採りコース」、カモシカを見るときにはカモシカを見るためだけのコースというのをたくさんつくり、ＪＲと組んで仙台−東京圏にインターネットで発信し、彼らは十分楽しく生きています。

「運輸と経済」という雑誌から、グリーンツーリズムがなぜだめか、どうすればよくなるかという原稿を書いてくれと頼まれました。グリーンツーリズムが１９９４年にできましたが、もう全然だめなのです。その前に森林都市構想をつくったがこれもだめで、その前の大型リゾート開発も大失敗です。なぜ失敗したかですが、それには人をつくることだということで、人を育てるために塾をつくりました。

福士先生にも協力していただいたのですが、クォリティ・ライフ研究所を成立し、西川塾を開き、以降、第四次の「にしかわ幸せづくり物語」まで、青年たちが２０年くらいかかわり、やりたい放題なのです。この人たちが何が一番ポイントかというのは、ワーズワースやポターたちが詩を作って人を引きつけたように、一番最初は詩人がいてくれなければ今はだめだということで、丸山薫という人が西川町では生涯学習のテキストになっており、子供からお年寄りまで、みんなこれを読んで育っているわけです。

３−４　ワイルドな自然に立ち向かう詩人たち

明治のとき、イギリスで病弱だったイザベラ・バードが、体を丈夫にするために一番ワイルドな自然を旅することに求めました。そしてたまたま日本に来て、原始的な生活をしているが自然とのかかわり方が非常にりっぱだということで、『日本奥地紀行』を書きました。

都市で生きる人々が、大自然にあこがれるのは、どの国においてもみられることです。しかし、荒々しい大自然に最初に引きつけられるのはいつも詩人です。日本でもよく知られるピーター･ラビットの故郷のイギリス湖水地方もそうでした。そのことをピーター・ミルワールドの「英文学史」を案内にして湖水地方を見ると、産業化で都市全体が荒れたときに、みんな北イギリスの荒々しい大自然に引きつけられ、その最初のきっかけをつくったのはワーズワースです。１８世紀前半までは、自然を意味する「ネイチャー」というのは「ヒューマン・ネイチャー」で、山、川、森、生物を意味していませんでした。夏目漱石も、行ってみて、このことに気がつきました。ワーズワースの「The Tables Turned」（発想の転換をこそ）という、机をひっくり返し、部屋などにいないで自然の世界へ行こう。自然は全部教えてくれる。自然は生き物である。宇宙自身が生き物だという、宇宙の生命力のすばらしさをうたうわけです。

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

３−５　ブナの原生林の「月山自然学園むら」づくり

同じようなことを西川町でもやろうということで、１つは月山というところで出羽三山の山岳宗教というのがありますが、もう一つ、ブナ林というのは治水、利水、親水、さらに親雪、利雪、克雪という、水や雪を大切にしてくれるノウハウをブナ林自身が持っています。西川町というところはあまりにも恵まれていて、ブナ林の価値について今の若い人たちはとかく忘れやすく、それをどのように動機づけるかというので、２１世紀の最大課題は水であろうと想定し、水の国際サミットを開こうと今考えています。

今泉忠明という人が『絶滅動物誌』を書き、山本七平賞をもらったのか候補になったのか。彼の話がすごくおもしろかったのは、動物園に行ってトラ・ライオンを見ると、だれもあそこは野性のライオン・トラではないとわかります。それは、野性のぬいぐるみのライオンを着た弱い生き物でしかなく、トラにしても、キリンにしてもそうです。人間も、都市という動物園に人間のぬいぐるみを着た、野性で生きる能力を身につけていないぬいぐるみを着た弱い生き物でしかない。つまり動物の分類を考えるときには、野性の状況で生きる能力を入れなければならない。そうすると、動物園の動物は、野性の状況で生きる能力がないので、それらにあてはまらない。しかし、それは人間も同じである。人間があるとき突然、絶滅する可能性があるという話をしていただきました。

そうすると、どのようにすれば我々も都市に住みながら、野性のワイルドな能力を身につけることができるかというと、都市に住まざるをえないわけですから、もう一方で志田さんのような人とつきあい、ワイルドな自然の中で生きる能力を絶えず学習し続けることが大切です。そのときに、丸山薫の詩がすごくおもしろいのではないかと思います。

これは建設省の予算で行った『自然学習のカリキュラム体系』という厚いレポートですが、生涯学習で教養学部・専門学部・専門学科ということで、野性の自然で生きる能力をどのようにすれば回復できるか、というカリキュラムを作ってあります。これを一つ一つ、今、西川塾のＯＢたちは商品にしているのです。

そして最後に、「グリーンツーリズムの理念と方法に欠けていたのは、西川町のように地域に根ざした中心価値から発想した商品づくりではなかったのではないのか」。つまり、丸山薫のような世界を中心価値にして、マタギの志田さんのような人のライフスタイルを形態価値の具体的な商品にし、インターネットその他でフォローアップしたり、事前にネットワーク、コミュニティをつくり、そして情報交換。体験した人たちの記録を全部インターネットで乗せ、コミュニティをつくり、冬山なので１回のツアーで　１０人とか１４〜１５人しか呼べないのですが、それで結構楽しみながら生きているわけです。農林省や林野庁も、このようなソフトからライフスタイル、ライフスタイルから商品のつくり方がわからず、グリーンツーリズムやリゾート法、森林都市構想などと言っているのは、少しおかしいのではないでしょうか。

本当は、福士先生が来ていればコメントしていただいて議論をと思ったのですが、この話に関連して、隣の大江町に小田さんと中田さんが年中かかわっており、月山の山岳へ行

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

っているわけです。私はこういうことをやっており、お２人はまた違うことをやっていると思います。

３−６．大江町の町づくり

（中田）　大江町は西川町の隣の町で人口は約１万人です。最上川と朝日連峰の間に位置し、サクランボや桃、リンゴ、ラ・フランスなどの、くだものの生産で知られています。町民の多くは、山形や寒河江市に通勤していますので、田園地域のベッドタウンといった町です。

私は、平成５年から現在まで、６つのプロジェクトをお手伝いするために大江町に参りましが、当初の町づくりと現在の町づくりがかなり変わってきた様な印象を受けました。始めは、最上川沿いの町有地に温泉が湧いたので、温泉施設の計画のお手伝いをしました。温泉施設は２年後に完成しました。次に、山間地域の活性化をどうするかということで、西川町など近隣市町村の試みを参考にしながら、山里を体験する各種プログラムやツアーの可能性を検討し、アウトドアライフの拠点づくりを提案させて頂きました。大江町は山間部、田園地域、最上川沿いの市街地といった地域特性が明瞭な町です。市街地に近い里山をどのように活用するか、町民の里山としてどう保全するかといったプロジェクトや、朝日連峰に近い神通峡という美しい渓谷について、自然学習の体験コースとしてどう利用するかというプロジェクトに参加しました。近年、小田さんと一緒に、町全体の計画に参加し、町の将来像の検討や、町の文化資源、自然資源を生かし、町全体を故郷学習の場所として推進するためのシナリオづくりをお手伝いしました。

この１０年近く、大江町との関わりの中で、地域そのものも変化しましたし、地域づくりのコンセプトも随分変わってきたことを実感しました。１０年前の大江町には、柏陵荘という老人福祉センターに温泉浴場があり、町民が利用していましたが、　来訪者は年間１０万人ほどで、朝日連峰登山やキャンプなどのアウトドアライフを目的にした人達でした。その後、山間部には柳川温泉、市街地近くにはテルメ柏陵という町営温泉施設が開業しますと、約７０万人の交流人口になりました。つまり、１日に直しますと、人口１万に対し２千人の訪問者があると言うことで、こうした訪問者の目を意識して、町をどうするか、産業振興、景観美化や自然保全をどうすれば良いかといったことが、町民にとって初めて身近な具体的な課題となったような気がします。大江町の場合、町づくりの契機となったのが温泉施設の整備でしたが、町づくりや地域づくりにとっては、ある程度交流人口を集める手段が不可欠だと思います。その後のプロジェクトでは、住民の方々と意見交換会をやりましたが、当初に比べ、積極的な意見や具体的な提言を耳にする機会も増えましたし、具体的な住民の活動も活発になったような気がします。プロジェクトも当初は温泉施設、キャンプ場などの施設整備が中心でしたが、数年前から、交流活動や環境保全活動、環境美化運動といった推進方法や推進体制などの具体的な検討が中心になりました。

町の総合計画にしても、町民の関心も高くなり、自分たちでも検討し、提案したいとい

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

う感じもあります。自治体側でも、施設づくりは補助金などを利用すれば、簡単につくることができます。たとえば、公園をつくるのは良いけれど、それをどう維持管理するかという方が、問題になっています。やはり、町民や住民と協力し、計画し、環境を管理運営しなければならないという時代になってきました。また、次世代の人に恵まれた自然や田園景観をどう残すか、そのために自分たちは何をすればよいかというような共通意識がうまれつつあるような印象を受けます。このようなことが、大江町のこの１０年間の変化ですが、全国各地の地域づくりも同様なのではないかと思います。

（小田）　場所は、西川町がこちら側で、ここが最上川、ここに月布川があるのですが、この沿道に沿って、こちらが山間部です。ここは、左沢（アテラザワ）というＪＲの最終駅で、左沢線で山形から 30 分です。

（松田）　左の沢と書いて、だれも読めませんね。

（小田）　そして先程、先生が入られた西川町はこちら側です。ですから、大江町も奥へ行くと、西川町と同じくらいの雪が降るような豪雪地帯です。

（松田）　匠のライブラリーを作ると言ったのは、大江町ではありませんでしたか。

（中田）　こちらではありません。伝承館が西川町にありますね。

（松田）　西川の方もやっていますが。

（小田）　今回、ここには「山城」と書いてありますが、南北朝時代に館（たて）の跡がたくさんあり、これの復元をして集客をしたいということです。ですから、古墳時代からの歴史をずっとたどりました。

（松田）　大江家というのは、在原業平の流れをくんでいますね。

（小田）　西川町にもたくさんありますが、戦国時代にこれだけお城がありました。これが左沢の館ということで、南北朝時代。これが館の跡の治水です。このようなお城があり、これは発掘をしてありました。

（手塚）　きっと洪水を呼び込んだのですね。

（松田）　彼とは、かかわり方の次元が違うので比較にはなりませんが、山形全体につい

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

て、私は２５年かかわっていて、松田塾というのは、主立ったところは全部つくりました。そのモデルは西川が一番のモデルで、市町村の松田塾を全部、西川に集めて合同塾を何度も行いました。

先程のようなポイントは、山岳宗教であったり、詩人であったり、国家神道になってからの明治ではなくて、国家神道になる前の神道、または密教のところに立ち戻ろうと。国家神道になってから、相当おかしくなり、神主の大官僚制度を作り、出世をして偉くなっていくという神主の堕落が起きて、鎮守の森の神主さんはいなくなってしまいました。コミュニティで生きて、死んでいった人たちの魂を大切にするという神主さんがいなくなりました。ところが、山形のようなところは、そのような神主さんたちが今でもいるわけです。出羽三山の羽黒山に行くと、そこに神道でありながら水子地蔵の空間が相当広くあります。

ですから、明治以前の日本人の宗教観を大切にしようと。忘れていた精神世界をもう一度、みんなで若い人たちに確認させ、モダンなところでは先程の「クロユリ」「かもしか」「なめこ」など、丸山薫のような世界に動機づけながら、具体的なアウトドアライフのライフスタイルをつくろうと。読売広告社の椎名誠の『山形』は、東京から行って引き上げてくるかたちのイベントなので、地元に定着しないのです。

（小田）　人気はあったようですが、もうかったのはＪＲだけですね。

（松田）　人気はあったとしても、地元がただ働きさせられて、残るのは疲労だけなのです。ところが、西川のようなやり方は、地元主導なのです。なぜそういうことに気づかないのか、私はＪＲや東北電力に対して不満なのです。全部上から下りよう、下りようと思うわけです。ライフスタイルのコミュニティが出来上がっていけば、それが田口ランディ（ノンフィクション作家）ではありませんが、インターネットのお得意様なのです。それが西川町では、おかげさまでできてきたという報告です。

やはり人を創るところに力を入れることです。もう１度やれと言われるとできませんが、40 歳ごろなのでできたと思います。後藤先生の弟さんも東大の教授をされていますが、山形に最初おられて、何回かお世話になっています。やはり人を育てるところが一番、地域振興の要で、その人たちがよかったと思う仕事づくりでなければ、こちらから植民地のようにして行くというのは、もう限界だと思っています。

そんなことで、すべて含めて総括セッションをしたいと思います。

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

セッション４　「総括」

４−１　地域における価値創造

（中田）　わりと最近は地方どこでもそうですが、６０前後の奥さん連れがカメラを抱えて、いろいろな花を撮りに行ったり、動き回っています。最終的にそういう人たちは、教養旅行をしているわけです。自然を鑑賞して、もっと深く知りたい。それに対して、適切な資料がない。先生のところでは、志田さんという造詣の深い方が案内してくれたそうですが、一般的にはとおりいっぺんの案内で終わってしまいます。歴史的なことも、町史などたくさんの文献がありますが、それを生かし、地域の文化や歴史をわかり易く紹介してくれると、俄然その町や地域がおもしろくなってくるのではないでしょうか。

先程のセッションでは手塚さんから山梨県のケースが紹介されていましたが、信玄の時代の城や遺跡についても新しい発見があります。こうした資料は倉庫、書庫の片隅に収納しているのではなく、もう少しわかりやすく紹介していただけるといいと思います。

（松田）　私はそうではないと思います。結局、人間の本質に動機づけなければだめなのです。私が今まで経験してきて、人間の本質に動機づけること、そこに気づいてもらえば、信玄だ何だかんだそれ自身に動機づけるのではないのです。最初に、本質に動機づけると、手段として信玄がかかわってきたり、アウトドアのバレエがかかわってくるのです。人間と自然の関係の本質、または田園生活と人間の本質に動機づける。そこのポイントだと思います。ところが、そこがみんなサイトが長くて、我慢できなくて、すぐ具体的なところで発信しようとするから、なかなか広がらないと思います。

両方ニュートラルに聞いておられて、いかがですか。

（後藤）　先程バレエを見て思い出したのですが、今、大森の映画館で「ホフマン物語」をやっています。これはイギリスの作品で、１９５１年当時のテクノカラーで、総天然色といううたい文句でできた映画です。オッフェンバッハのオペラを、イギリスのバレエ団がバレエにして映画にしました。映画なので、人形が踊り出したり、ローソクが宝石に変わったり、いろいろなトリックがあり、映画とバレエとオペラを総合したものです。１９５１年ですから、第２次世界大戦が終わって、イギリスが６年ぐらいで創った映画です。イギリスは戦勝国ですが、空襲でメタメタにやられており、その後、大英帝国は解体していくわけで、決して豊かであったとは言えない時期です。しかしその当時としては、映画としても非常にぜいたくなものです。私は、これに底力を感じました。

日本の１９５１年というと、私は戦後の焼け野原を走り回り、それはそれで楽しく遊んでいました。親は野放し、子は野放図と言われるように、何の制約もなく焼け野原で遊んでいました。しかし私は、ぜいたくな、手の込んだ、それをけばけばしく見せるのはよくありませんが、大変なところまで神経の行き届いた、一見わからないけれど人間の手の入

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

った文化だと思います。

もちろん、自然があるから、その中にアーティフィシャルな部分が美しく入ってくるわけで、それは舞台を壊してはいけないのです。しかし、アーティフィシャル（人工的）な、人間の作ったぜいたくな文化を大切にした生活が、自然の中で日常的に営まれているという地域が、魅力のある点だと思います。

地域おこしなど、特に集客・ビジターズ・インダストリーということで、魅力を感じてそこに人が集まってくれる地域をつくる場合は、手塚さんも、行きたくて商工労働部に行ったのではないと思いますが（笑）、もともとは企画でやっていたわけです。産業政策、特に昔流のターゲットポリシーとしての、将来有望想定産業保護育成政策というものではない。本来の地域の文化をつくるというポリシーとして、何かができれば人は来るわけです。人が来れば、既存の産業も新しい産業もそこで仕事になってくるわけです。やはり基本は文化をつくるのに、ぜいたくで一見、普通のマーケットの活動では、その価値が理解してもらいにくく、お金が集まりにくいものについて、断固行政がやる。政治が責任を持ってやってみる。失敗したら、知事や市長が首になればいいわけなので、そういう断固、ぜいたくな文化ポリシーを、地元の人の琴線に触れるようなかたちで、アカウントして（責任ある説明をして）、納得してもらい、税金を使わせていただいて行う。そういうことができる自治体が、強いのではないかと思います。

確かに論理的に言うと、武田信玄が主なので、ということになりますが、それも私流に言わせるとアカウントの１つで、シンボル利用になってくると思います。問題は、やはり松田理論で、その地域に行けば、このような価値をつくっている現場に行く。このような価値が息づいている生活の現場に行くという、価値創造に地域がなっているかどうかだと思います。それはいろいろなものがあり、そういう意味では、私は箱物も否定しません。箱物も、いいものは造った方がよいと思います。舞台やスポーツ施設もそうだと思います。馬術場なども、前の町長が、馬が好きなので国体でまで馬術場を引き受けましたが、馬術も非常にビジターズ・インダストリーなのです。もっと発展させると、衣装から付属品、装飾品から、非常にぜいたくなものです。ローマの公園などに行くと、馬に乗った人たちが歩いています。ですから、山梨県警甲府は、騎馬警官を登場させるとか（笑）。とにかく今、少し縮こまっていて、ケチを考えようとなっているので、まずいと思います。

（小田）　今の武田信玄の話ですが、シンボル利用するにもお金がかかると思われます。先程の犬塚さんの話しに出てきたインテリジェント都市賞のラグレーンジにしても要するにお金はどうしたのか。インフラを整備し、２７,０００人くらいの都市で、当然、市が行うということは税金です。

（犬塚）　レポートにありますが、インフラ企業を巻き込んだのです。１つのモデルを作り上げたのです。

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

（小田）　プレゼンテーションも、すばらしかったのですね。

（犬塚）　市長が、次の町づくりはこうだ、というのを出すだけの力があるか。いろいろな企業の力添えというネットワーク性が広報面では強調されています。

（小田）　山田村が全部、光ファイバーと言っても、３００戸くらいしかない村ですから、ラグレーンジの２７,０００というのはすごい規模で、ちょっと日本ではこういうことはないと思います。

４−２　人材育成

（松田）　トータルセッションで、「人材育成」ということが、一番最初の小田さんと手塚さんのところに書いてありました。私もここ３０年やってきたことは、地域でどう人をつくるか。今一番力を入れているのは、伊勢のおんし塾の人たちとの人づくりですが、やはり人材育成でかかわっています。

（福士）　こんにちは。私が聞いたのは金曜日なので。今日は横浜へ行く約束があったので遅くなりました。

（松田）　ちょっと話が伝わらないので、応援していただきたいと思っていたのは、西川町はおもしろいということを、この人たちにコメントしていただきたいと思います。私は言ったのですが、まだ伝わりにくい。２０〜３０年やってきたことを、３０分くらいでは伝わらないことがよくわかりました。

やはり、思いは伝わりませんね。バイオリンのコンサートを開いている人の思いも、結局みんなレベルは同じなのです。彼は赤字覚悟でも、とにかくバイオリンを作り、自分の作ったバイオリンを弾いてくれている人を集めて、音楽会をやると。私も人づくりで、西川にある理念でやってくれる若者たちをつくり上げていくことを、２０年くらいやってきて、結構育ったと思っています。それをずっと最初から福士先生は見ておられるし、ついこの間も西川町の集まりがあり、ここ２０〜３０年、西川町とかかわった福士先生の感想を述べていただいて、合わせて最後のファイナルセッションに入っているところです。

（福士）　どう言ったらよいのか、難しいのですが、つまり山梨県は何も苦労することはない県だと思います。つまり、東京という大きな人口があり、その人たちに山梨はよいところだと認められ、長野もよいところだと認められている状態なわけです。ですから、山梨で何をやっても、ある量とある質の人たちが興味を持つわけです。ところが、山形県くらい離れてしまうと、日常的になじみが少ないわけです。松田さんは多いと言っています

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

が、それは山梨と東京との関係、東京と山梨の関係と比べると少ないです。そういうところに、実はすばらしい人たちがいて、非常にすばらしい実験をしてきたというのが西川町だと思います。羽黒山も庄内の人たちも、県庁や市役所、町役場の人たちも、みんなある志を持って、東京をあまり考えず、自分たちの町を中心とした考え方を進めていました。

その意味では、山梨の場合は、東京という大きなマーケットが何を考えているかを考えればいい。けれども、まだ山形県はそう簡単ではありません。今度のように雪が降ると、新幹線は止まる、バスは発着しない。やはり東京との距離感が非常に出るわけです。

それでは宮城県はどうかというと、スタイルも生き方も山梨とは全く違う県です。仙台市は非常に徹底した支店文化の町です。例えば東北大学がありますが、法学部は東大の支店で初めての法学部長は平成になってからです。そして仙台藩の場合は、家老たちが結託して、伊達さんという殿様を明治の時に仙台から追い出してしまって、すべて家老たちの天下の町にしたのです。七十七銀行、河北新報、東北電力、ガス、銀行、藤崎デパートの経営者は、すべて元仙台藩の家老につながる家柄なのです。家老につながる家柄が明治維新以降の完全な支店文化を作った。第二師団があり、第二高等学校があり、東北大学と、そしてみんな仙台支店長というので、かなり各一流会社の人たちがずらりといるわけです。それもわりと若い支店長です。そういう人たちをおだてながら、実は仙台市に対しては、一切発言をさせない、というかたちで長いこと宮城県を経営してきたのです。

非常に不思議なことに、あそこの知事や市長は東京出身の役人出が多く、地元に土着性がないので、淡白な人が多く家柄組からみると都合が良かったのです。そういう歴史は山形と違います。山形市は歴史の浅い町ですし、歴史の古い庄内は庄内、俺たちは俺たち、西川もそうです。そこからある志を持ってやろうという人達が出てくる県なのです。

その例が、松田さんという奇想天外な、何と言ってよいかわかりませんが魅力のある人です。松田プロジェクトは、西川がわりと独立的な地域だったので、できたと思います。あそこで塾が延々と続いていたり、講と称するメンバーが何十年も変わりません。どちらかというと、私の趣味とは少し違う人たちです。私にも矛盾したところがあります。

２日の日経新聞に長谷川さん（㈱はせがわ 社長）が書いていますが、彼のお茶の先生の小堀流で、家元の交代があり私たちが十数年ご指導をいただいている家元がこの間引退し、２日に新家元の初釜に行きました。その前に皇居に行こうということで参賀に行ったわけです。参賀に行くというのは、私の精神の日常性にないものなのですが、でも集団意識で戦後一度も行っていないのはおかしいかと（笑）。戦前、負けるまでは何度も行きました。小学生時代はそういう時代なので、もう行かなくてもよいと思っていたのですが、みんなで参賀に行きましょうと。長谷川さんはきちんと我々に日の丸まで用意してくれて、陛下が奥から出てきて「万歳」などとやりました。それから小堀さんの新初釜に行きました。

私の精神というのは、そのような構造なのです。それは、私はばかにしていたわけではなく、どうしてもなじめない何かがあり、そういうところから遠ざかっていました。それを松田さんは、私にそれを強要してきたわけです。お伊勢参りも、彼より私の方が熱心か

©財団法人ハイライフ研究所 http://www.hilife.or.jp

もしれませんが。うちでは毎日５時半に、必ず「かけまくもかしこき、いざなぎの大神・・・」きちんと言い、自分の行った神社を「弥栄（いやさか）」と言ってやっています。これは言いたくないのですが、私に対する「松田効果」なのです（笑）。

ごく最近、朝日新聞に前の一橋大学学長の阿部謹也さんという中世をやっている人が、非常におもしろいことを書いていました。つまり、大学というものは、世間をやってこなかった。実際に発言力があるのは世間である。新聞紙上で見ると、政治家が失言したようだが、そうではなく、あれは地元で受けている。森さんは地元で受けているわけです。とにかく「神の国」などと言うと、受けているわけです。阿部さんは今、共立女子大学の学長ですが、中世の話を読んで実におもしろいと思いました。

確かに明治以降、ヨーロッパ型の言葉や感覚に非常に偏している。アカデミズムや大学の先生はそうなのですが、不思議に松田塾をはじめ、そうではありません。松田さんのように世間をかなり手玉にとって、全員で勉強をしてきたグループなのです。そうすると、私などはつくづく反省しますが、「俺の地域は何だ」というと、やはり東京から権威を持って行った浮き草のようなものではないかと思います。

その実験には、群馬県は格好のところなのです。東京から行った権威でなければ地元は受け入れません。しかし、その人たちは本当の親近感を感じるかというと、感じません。県庁など、知事は違いますが、部課長以下にはほとんど東京出身はいません。太田市などもそうです。工業都市などとばかにしますが、東京から行った人は住めません。大学の先生は、とにかく最後に帰りの急行に乗るときが一番うれしいと言います（笑）。そういう町です。

ですから、関東以北というのは遠いのですね。最近やっと埼玉県が近くなりました。私は、埼京線というのは、あんなに近いのかとびっくりしました。戸田なんてすぐに着きます。昔は、戸田まで行ってボートを見るというと、おにぎりを１０個も作っていかなければ到着しないようなところでした。ですから埼玉は、秩父などを除けばかなり変わると思いますが、群馬は依然として変わりません。東京から近いように見えていますが、心理的な距離としては実に遠く、明治以降が克服されていません。あるのは世間ばかりで、そういうところで私はいくつかの審議会の会長をやっていますが、地元の人達は何も福士に判断してもらおうなどと思っていません。あの人は必ずイエスと言うと思って、やらせているだけなのです（笑）。福士も群馬県に行ったら世間の部分でつきあうと思って、相手は安心していますが、福士の方は、それは居心地が悪いわけです。

ですから、それに比べると山形県というのは隔絶したよさがあり、本当に不思議です。

（松田）　それで大体締めくくり、クロージングでよいのではないでしょうか。コメントがあれば発言してください。

（松田）　犬塚さんは、西川へは行ったことがないのですね。

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

（犬塚）　ありません。

（松田）　行った人と行っていない人では、わかりませんね。手塚さんはいかがですか。

（手塚）　私もありません。

（松田）　あんなに山形へ行っていて、行っていないのですか。

（手塚）　西川は行っていません。

（松田）　大体、地域おこし、イコール山形、西川でしょう。

（手塚）　今、松田先生のおっしゃられたことはよくわかります。冒頭、小布施の市村さんの話をしましたが、市村さんのところで、お蔵の蔵に部活動の部と書いて「蔵部（くらぶ）」というお店をつくりました。そこで行っていることは、昔、杜氏さんに食事を出したのを・・・寄付き料理と言ったらしいのですが・・・この再現です。大きな調理場をすべて見せて、真ん中に竈を１つ置いて、竈でご飯を炊くわけです。そして蔵部の経営の原点は、地元の人が来てお喋りできるような店をつくる、ということのようです。先ほど「結果観光」とか「結果産業」について説明申し上げましたが、内なる活力の大きさが結果として外の人も惹きつける、とおっしゃっていました。

それから、「蔵部」や、その向こう側の「傘風楼（さんぷーろう）」「碧椅軒（へきいけん）」というレストランやバーを設計したのはアメリカ人の女性の建築家です。市村さんは「今は日本のことがわかるのは、日本人ではない」と解説してくれました。要するに日本を研究している外国人の方が、良さがわかる場合があるということです。もちろん、すべてがそうではないでしょうが。

先程、広域地元と言いましたが、良い町をつくるのには、ある程度の都市機能が必要で、そこに交流人口を使えばよい、その程度に考え、最初から交流人口の増大を目指そうということは、考えない方がいいとおっしゃっています。それは先程の西川のことに、共通することもあるなと感じながら聞いていました。

（松田）　西川の場合、これだけの人数を募集しようと思うと、コミュニティができているので、声をかけるとその頭数、収容人員・定員は来るので、問題が何も起きないのです。

ところが、彼らがりっぱだったのは、リゾート開発のときに、大型リゾート地をずっと回ってみて、「ああ、みんな地元は下働きだ。町長、大型企業は、リゾート開発を入れないでくれ」と、全部青年たちがキャンセルをお願いし、１つも入れませんでした。結局それ

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

がよかったのではないかと、今になると思います。

（手塚）　それは人材育成の結果ですね。
　ところが、人材育成ほど難しいことはなく、役所の予算を使ったシステムで行おうとするのは、大変難しいのではないかと思います。

（後藤）　人材は育成できませんから。自分が人材になっていかないと。

（手塚）　要するに、私なら私がはいずり回ってやって、何かできるかというくらい。

（松田）　手塚さんも、役人を越えてやっていると思います。役人の給料の外のところで、一生懸命やっています。潮田君もそうですね。もう全然県庁のことを信用していません（笑）。それで、みんなボランティアでばかりやっています。ですから、地域おこしという新興宗教だと思います。

（手塚）　今年「バーチャルビレッジ・ドット・M」というメッセを、山梨のアイメッセでやろうという企画が持ち上がっています。ただ、こうした企画を県庁を介して進めようとすると、スピード、という点で大変に無理があり、結果としてスムーズにいかないケースが多く見られます。今日の役所システムの中では、確かに人材育成が難しい、という側面もあります。

４－３　失敗例の分析
（福士）　あまりにも失敗の例が多く、一番代表的な例は北海道だと思います。トマムやサホロなどが北海道で設計されたときは、どこまで成功するのかわからないようなかたちでした。県庁も全面的なバックアップでした。
　結局、条例も、企業が共同開発をしているレンガに一番合うような条例をつくったのです。全部そのようにしなければならない。そして、あそこのいろいろな設計は、確かにすばらしいと思いましたが、例えばホテルオークラと同じスタイルのホテルを建てて、ホテルオークラよりもアプローチの面積が広いのです。雪の中で見ると、東京のオークラの方が大きく見えるのですが、広大な風景の中で実際はトマムの方がとにかく大きい。
　またバスなども、全部、私道にしたために運輸省が口を出せず、今は常識的になっているスキーを運び込むのに一番便利な低い床で、戸口が大きいバスを走らせたわけです。それは私道だから許可が出たわけです。町道などは一切なく、全部私道にしました。
　そういうのはすばらしいのですが、あのとき基本的な問題は、あそこは雪が張りつかないのです。昔から、北海道のあの地域はそれで有名でした。つまり、風も強くて寒いけれど、根雪になる部分が着かないのです。雪が不安な状態のところで、スキー場というのは

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

どうなのか。サホロに行ったとき、雪の心配をしたら「そんなこと言っても現に雪があるでしょう」といわれた。確かにあるのですが、構造的には、北海道で東を向いた斜面は、全部そのようになっているのです。

それが一番最後に、スキー場設計を三浦さんが設計したといっていますが、三浦さんが「そうではない」とあとで言いました。設計は非常に単調でした。

いくつかのアイディアはよかったです。例えばワインやウイスキーなども相当の品種のものが並んでいたりする。若い人はみんながっついてスキーに行かず、ホテルから雪を眺めて、お茶を飲んでいるというのはいいと思ったのですが、何しろ肝心の雪が少ない。

サホロの方はもっとありました。地中海クラブがやったのですが、フランス人と日本人は、社交という場で永遠に合わないと思います。全体がちんけに見えてきて、うんと若い人はいいのですが、中年以上の人から言うと「俺、今日騒ぎたくないんだよ」という日まで騒がなければならない（笑)。愛していない奥さんにも、「I Love You」と言わなければならない、そんなようでしたよ。

今になるとあの２つのリゾートのケースは、だれかがきちんと、本当の失敗の理由を調べる必要があると思います。あのときは、むしろ逆だったわけです。県も市役所も町も、大賛成でしたが、しかし、住民の中には怒っている人もいました。なぜかというと、従来住んでいた住民の家は、「あなたの家が見えるとリゾートにならない」ということで、全部隠されてしまったわけです。そこまで徹底しました。そういう意味で、あれは非常に参考になると思います。

それから安比自体も、風が強い雪の状態があるのですが、あそこではいくつかのおもしろい住民レベルの実験が行われ、先程のお話とはむしろ逆です。つまり、東京の渋谷でフランス料理をやっていた人が、本当にりっぱなキッチンを造りました。「東京でもこのレベルのフランス料理はありません」と威張っていました。

私の友達が菊池牧場というのをやっていて、彼はそのようなキッチン経営がやりたかったのです。しかし、牧場経営に忙しくて、１５０ヘクタールの土地で牧場をやり、結局、彼の思うようにはいきませんでした。

（松田）　ついでに、ハウステンボスとスペイン村の２つを総まくりお願いします。

（福士）　私は、ハウステンボスはあまり知りません。あそこにできるな、この辺らしいなとか、１度夜酔っぱらって行き、夜泊まって朝一番で帰ったという記憶しかないので、何とも言えません（笑)。

長崎の方は、最初のころはすばらしかったです。

（松田）　ハウステンボスでも、形から入っていったと思います。形からではなく、内容から入り、ミニマムで長期にわたって造っていけばよかったものが、一気にイチ、ニッ、

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

サンでつくったのです。それは筑波と同じで、最初は国際建築博覧会場だと私も思いました。ところが、イチ、ニッ、サンで造ったので、イチ、ニッ、サンでガタガタとなります。今はもう大変で、あれは落ちる、これは落ちる、ヒビが入るとガタガタです。しかし、地中海のように何年もかけて造ると、景観はマッチしているし、だめになったのを造っても新しく造っても、周囲の景観に合うように造ります。ところが筑波は、そのときのファッションでイチ、ニッ、サンで造ってしまったので、これから先、大変だと思います。

同じようなことが、ハウステンポスについても言えると思います。イチ、ニッ、サンでとにかく造ってしまったわけですから。

（福士）　前はまだ、それなりに設計上のゆとりもあったし、規模も小さかったし、時期もよかったというので、収益事業になりました。そして興銀がこれは絶対にもうかると思ってしまったわけです。そして、ずっと海なのでそのように見えないかもしれませんが、埋め立て工場用地を転用したので、県もこれ幸いとばかりに「今やリゾートの時代」だと。

４−４　遊び方を知らない日本人

（松田）　結局、興行銀行もリゾートを知らないのです。同じことは、日本航空の人事担当重役から頼まれたのは、うちは旅行業をやっているのに、旅行を知っている人間、楽しんでいる人間が、日本航空の社員と家族にだれもいないと言うのです。ただ券はみんなもらっているのですが、旅行の楽しみ方を知らないと言うのです。そして、レジャーカウンセリングで、人生の楽しみ方を教えてくれと言われ、これも１０年くらいやりました。今でもその人間関係があり、ときどき声がかかります。

同じように興行銀行であれ長銀であれ、リゾートライフなどは知らないわけです。お金の貸し方しか知りません。ですから、初島も大失敗です。あんなものは造るべきでは絶対にありません。初島は長銀ですが、熱海のあんな小さなところにあんな巨大なものを造り、民宿を全部つぶしてしまったわけです。

そしてスペイン村も、なぜあんな必然性がないのに、スペイン村を造ったのか。熱にうかされたように、みんな大型のものを押していったのが、不動産や銀行であり、長銀、興行銀行なのです。

（福士）　一番基本的なのは、旅行業にかかわる人が、本当に旅行を楽しんでいないというところが、日本の場合すごくあります。例えば北九州に新日鐵の造ったスペースワールドがある。あれをやっている人を、私はよく知っていますが、博多ドームをやったときのプロデューサーで、新日鐵から来ているのです。彼はあそこで成功したというので、中内さんを助けて、ドームを造ったわけです。「シーホーク」というホテルとドームを造り、すべてのスペースを商業空間にしたのです。それが東京の後楽園ドームよりもずっと新しく、中のプライベートの部屋もきちんとトイレまで付いていて、スペースも大きいのです。そ

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

してすべての空間、歩いているところを、すべて飲み屋やゲーム屋にしたわけです。
　しかしやっている人、組織にいる人は鉄屋さんなのです。途中でやめておけばよいのですが、どんどんいくと結局、鉄屋に戻ってしまうことがあります。

（松田）　働いているときには日本は失敗しないのですが、遊ぶところにかかわってくると大失敗するというのが、今回の１０年間の教訓です。

（手塚）　遊び方を知らない、ということですね。

（福士）　遊び方を知らないというより、できそうには見える。例えば西洋環境開発が博多にシーボネアというヨットクラブを参考にクラブを造るのですが、シーボネアを始めたのは全然違う人々です。シーボネアを始めた人は、逗子にいた、おやじが金持ちの兄弟です。そして、結局うまくいかずに借金になり、セゾンが安く買ったわけです。その流れの延長なのです。何をやるのかというとヨットです。しかし、博多の連中はものすごく遊び人が多い。全員が、仕事か遊びかわからないくらいの本格的な遊び人なのです。やはりそういうところではセゾン流の商法は受けない。西洋環境開発型の線の細い、サラリーマン型の遊び人はどんどん弾き出されてしまいます。そういうものがたくさんあります。

（手塚）　遊びのスケールが違うのですね。

（松田）　その筋の人と業界の人は違う（笑）。

（福士）　博多の財界というのは、台湾や韓国の財界とつきあっているのです。そのつきあい方は日本の財界で随一でしょう。韓国など、本当のオーナーです。今はアジアのマネーショックで少し変わりましたが、遊び方の桁が違います。
　よく私が例に言うのは、飲みに行って「これ持って来い」と言って、指１本立てたら１本ではなくて１ダースなのです。ところが日本は、大企業の社長でも１本なのです。連中は１ダース単位でしか頼みません。それは、その店のチップなのです。日本は、「これ」と言って１ダース持って来ると、「１本しか頼まないのに何だ」とかんかんになって怒るわけです。そのくらい違います。
　ですから、遊ぶのは無理だと思います。皆さんは遊んでいますが、私などは全く遊ばずに人生終わろうとしています（笑）。

（松田）　皆、どこで遊んでいるのか。バブルのころの、豪華船の世界一周のようなものは続いていますね。
　福士先生には、ちょうどよいときに来ていただき、ちょうどよいだけ話していただきま

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp

した。最初からいたら聞き役で１日終わったところを、ちょうどよい分量でバランスがとれたということで、めでたしめでたしで終わりましょう。

（小田）　本日はお忙しい中、ありがとうございました。

©財団法人ハイライフ研究所　http://www.hilife.or.jp